

鹿児島大学英語教育改革報告書Ⅲ

＜平成23年度－平成24年度＞

鹿児島大学 教育センター
外国語教育推進部

目 次

序	1
1. 23 年度・24 年度 G-TELP の実施状況について	1
1-1 G-TELP の実施概要	1
1-2 1 年次での成績推移	2
1-3 1 年次から 2 年次前期までの成績推移	3
1-4 各セクションの得点分布	4
1-5 まとめ	4
1-6 G-TELP 導入による評価の平準化の状況について	4
1-6-1 評価の平準化とは	4
1-6-2 G-TELP の導入による評価の平準化の状況：2 年間の動向	6
1-7 学生によるアンケート結果について	6
1-8 学生の Moodle 活用状況について	9
2. 入学区分と G-TELP の相関について	12
3. 出身県別区分と G-TELP の相関について	13
4. 英語アチーブメントテスト表彰制度とその運用状況について	15
4-1 教育センター英語アチーブメントテスト（G-TELP）表彰制度	15
4-2 過去 3 年間の英語アチーブメントテスト（G-TELP）の表彰実施体制	15
5. 結語 - 23 年度と 24 年度の 2 年間の総括と今後の展望	16

鹿児島大学英語教育改革報告書 Ⅲ

<平成 23 年度—平成 24 年度>

鹿児島大学 教育センター 外国語教育推進部

序： 本報告書は、先般刊行した「鹿児島大学英語教育改革報告書Ⅱ」の続編として編集したものである。平成 20 年度に始まった鹿児島大学の英語教育改革は平成 24 年度で 5 年経過した段階であり、その間様々なデータの蓄積がなされ、改革の進捗状況を見る上でそれらのデータを検証する、ということが本報告書編集の主たる意図である。

なお、平成 24 年度より鹿児島大学は、従来からの農学部獣医学科を共同獣医学部とし、その教育課程を山口大学と共同で実施することとなった。この学部には共通教育の外国語科目として英語Ⅰ(1 年次対象の通年科目)と英語Ⅱ(2 年次対象の通年科目)があるが、英語Ⅰは基本的に鹿児島大学方式で行われる点を付記しておく。

1. 23 年度・24 年度 G-TELP の実施状況について

1-1 G-TELP の実施概要

本学では 20 年度から各学期の第 11 週前後に、G-TELP (General Tests of English Language Proficiency) (国際英検)を実施している。このテストは、文法、聴解、読解、の 3 領域からなる目標基準準拠テストである。この G-TELP について、日本では最も難易度の高いレベル 1 からレベル 4 までのテストが実施可能となっているが、本学ではこのうちレベル 3 (英検準 2 級-2 級、TOEIC 400-600 程度)を採用している。23 年度と 24 年度は、資料 1 に示した日程で実施した。

資料 1 23 年度・24 年度 G-TELP の実施概要

実施年度	23 年度		24 年度	
	前期	後期	前期	後期
実施期間	6 月 27 日 (月) ～ 7 月 1 日 (金)	12 月 12 日 (月) ～ 12 月 16 日 (金)	6 月 25 日 (月) ～ 6 月 29 日 (金)	12 月 10 日 (月) ～ 12 月 14 日 (金)
受験対象者 (実受験者数)	1 年生 (2008 名)	1 年生 (1789 名)	1 年生 (1996 名)	1 年生 (1774 名)
	2 年生 (978 名)		2 年生 (1037 名)	
試験問題	Form 310 (1 年生)	Form 317	Form 310 (1 年生)	Form 317
	Form 319 (2 年生)		Form 319 (2 年生)	

本学での G-TELP は、1 年生向けの共通教育英語科目履修者全員を受験対象とし、これらの授業時間中に各担当教員に実施を依頼して行っている。また、22 年度から、2 年生向けに全 8 学部 (平成 24 年度より 9 学部) 中 5 学部で開設している共通教育英語科目「英語オープン」クラス履修者全員も受験対象とした。試験実施に際し、病気などの理由で受験できなかった学生への対策として、2 日間の予備日も設けた。

資料 1 の受験者数を見ると、両年度とも後期での受験者数が 200 人以上減少している。これは、本学の技能審査 (外国語技能検定試験) 合格者等の単位認定制度を利用して、英検や TOEIC などの資格や成績を取

得し、後期に英語科目を履修せずに単位認定を申請する学生が増えるためと思われる。

1-2 1年次での成績推移

23年度・24年度のG-TELP試験結果について、まず1年次での成績推移について概説する。本学では23年度・24年度ともに前期にForm 310を、後期にForm 317を使用した。また、資料2及び3は、23年度と24年度の本学全体の平均点の推移を示している。

なお、本稿で示すt検定で有意差を検証した全ての資料は、より正確な比較を期するため、各比較対象期間すべての試験を受験した学生のみを対象として分析している。そのため、これらのデータでの対象者は、資料1で示した受験者数と若干異なる。例えば、前期と後期の平均点を比較した資料2では、前期と後期の両方受けた学生のデータに基づく結果を示している。

資料2 G-TELPの鹿児島大学全学平均点推移（23年度）（調査対象者1734名）

	セクション	前期 (Form310)	後期 (Form317)	得点差	有意差
全学	GRM	60.9	64.6	3.7	あり
	LST	41.7	49.8	8.1	あり
	RDG	56.7	53.8	-2.9	あり
	TTL	159.4	168.2	8.9	あり

資料3 G-TELPの鹿児島大学全学平均点推移（24年度）（調査対象者1727名）

	セクション	前期 (Form310)	後期 (Form317)	得点差	有意差
全学	GRM	59.7	64.3	4.5	あり
	LST	41.4	50.0	8.6	あり
	RDG	56.1	53.7	-2.3	あり
	TTL	157.2	168.0	10.8	あり

まず、資料2と3が示すとおり、両年度とも全学的にTTL（合計点）は前期と比べて後期では上昇している。また、試験の各セクションのうち、GRM（文法）とLST（聴解）は後期で得点が上昇し、RDG（読解）は低下している。そこで、これらの得点の推移が単に偶然だったのか、それとも明確な理由による結果だったのかを確認するため、t検定で検証した。その結果、後期で得点の上昇が見られたGRM、LST、TTLについては、それぞれの推移に両年度とも有意差があった（巻末に詳細データを記載）。有意差とは、偶然に起こる可能性が極めて少ない差であり、受験者の英語能力に意味のある明確な差があったことを示す。つまり、両年度ともGRMとLSTの力は向上し、またTTLの結果からも、総合的に英語力は向上した、と言える。

一方、後期でのRDGの低下については、t検定の結果、23年度と24年度は有意差があった。つまり、何らかの明確な理由があって得点が下落したことが示唆される。

後期でのRDG力が低下、あるいは前期と同水準で推移した理由については、今後、詳しく検証する必要があるが、理由のひとつとして、前期と後期の試験問題の違い、ということも考えられる。

資料4と5では、両年度の試験結果を学部別にまとめている。得点推移の傾向は、全学同様、GRM、LST、TTLは後期で得点が上昇し、RDGは低下する傾向が見られた。後期でのTTLの伸びは、t検定の結果、ほとんどの学部の数値に有意差があり、これらの学部では後期には明らかに英語力は向上した、と言える。その後期での伸びの幅は、学部によって差が見られた。例えば24年度の合計点の得点差を見た場合、農学部の伸びの数値（得点差15.9ポイント）は、法文学部の伸びの数値（得点差8.6ポイント）の倍近くあった。このように、学部によって伸びに差があることに何か要因があるのか、今後、調査する必要がある。資料4と資料5を見るうえで注意すべきことは、24年度より山口大学との共同獣医学部が開設され、従来の全学8学部から9学部となった点である。

資料 4 G-TELP の鹿児島大学学部別平均点推移 (23 年度)

	セクション	前期 (23 年 6 月)	後期 (23 年 12 月)	得点差	有意差
全学	GRM	60.9	64.6	3.7	あり
	LST	41.7	49.8	8.1	あり
	RDG	56.7	53.8	-2.9	あり
	TTL	159.4	168.2	8.9	あり

	セクション	前期 (23 年 6 月)	後期 (23 年 12 月)	得点差	有意差
医学部 医学科	GRM	80.2	83.1	2.8	なし
	LST	54.4	64.7	10.3	あり
	RDG	76.4	74.5	-2.0	なし
	TTL	211.1	222.3	11.2	あり
医学部 保健学科	GRM	66.2	67.7	1.5	なし
	LST	42.3	49.3	7.0	あり
	RDG	60.7	58.3	-2.4	なし
	TTL	169.3	175.3	6.0	あり
教育学部	GRM	59.2	63.0	3.9	あり
	LST	41.9	48.5	6.6	あり
	RDG	55.6	52.9	-2.7	あり
	TTL	156.6	164.4	7.8	あり
工学部	GRM	55.2	60.1	4.9	あり
	LST	38.5	46.4	7.8	あり
	RDG	52.1	49.0	-3.1	あり
	TTL	145.9	155.5	9.7	あり
歯学部	GRM	80.9	80.4	-0.6	なし
	LST	44.1	50.8	6.7	あり
	RDG	70.8	71.1	0.3	なし
	TTL	195.8	202.2	6.4	なし
水産学部	GRM	56.0	59.7	3.6	あり
	LST	41.3	50.2	9.0	あり
	RDG	50.6	47.2	-3.5	あり
	TTL	147.9	157.1	9.1	あり
農学部	GRM	63.5	67.9	4.5	あり
	LST	42.0	51.7	9.7	あり
	RDG	57.8	56.0	-1.8	あり
	TTL	163.2	175.6	12.4	あり
法文学部	GRM	66.2	68.4	2.2	あり
	LST	44.1	51.8	7.7	あり
	RDG	62.5	59.3	-3.2	あり
	TTL	172.8	179.4	6.6	あり
理学部	GRM	58.8	62.7	3.9	あり
	LST	40.9	49.7	8.8	あり
	RDG	53.8	50.2	-3.6	あり
	TTL	153.6	162.6	9.1	あり

資料 5 G-TELP の鹿児島大学学部別平均点推移 (24 年度)

	セクション	前期 (24 年 6 月)	後期 (24 年 12 月)	得点差	有意差
全学	GRM	59.7	64.3	4.5	あり
	LST	41.4	50.0	8.6	あり
	RDG	56.1	53.7	-2.3	あり
	TTL	157.2	168.0	10.8	あり

	セクション	前期 (24 年 6 月)	後期 (24 年 12 月)	得点差	有意差
医学部 医学科	GRM	78.2	84.8	6.6	あり
	LST	56.4	63.9	7.5	あり
	RDG	75.0	74.0	-1.0	あり
	TTL	209.5	222.7	13.2	あり
医学部 保健学科	GRM	67.1	69.5	2.4	なし
	LST	43.9	51.0	7.1	あり
	RDG	61.8	58.7	-3.1	あり
	TTL	172.8	179.1	6.3	あり
教育学部	GRM	57.5	62.6	5.0	あり
	LST	41.0	49.8	8.7	あり
	RDG	54.8	52.0	-2.8	あり
	TTL	153.4	164.3	10.9	あり
工学部	GRM	54.3	59.0	4.7	あり
	LST	38.2	46.5	8.3	あり
	RDG	51.2	48.6	-2.6	あり
	TTL	143.7	154.1	10.4	あり
歯学部	GRM	68.6	76.6	8.0	あり
	LST	48.2	53.6	5.5	なし
	RDG	58.0	66.0	8.1	あり
	TTL	174.7	196.2	21.5	あり
水産学部	GRM	56.4	60.4	4.0	あり
	LST	39.3	51.0	11.7	あり
	RDG	52.6	49.7	-2.9	あり
	TTL	148.3	161.1	12.7	あり
農学部	GRM	59.1	65.9	6.7	あり
	LST	40.4	50.2	9.8	あり
	RDG	54.0	53.4	-0.6	なし
	TTL	153.6	169.5	15.9	あり
法文学部	GRM	63.4	66.6	3.2	あり
	LST	43.1	51.3	8.2	あり
	RDG	60.9	58.1	-2.8	あり
	TTL	167.4	176.0	8.6	あり
理学部	GRM	58.3	62.5	4.3	あり
	LST	40.8	48.4	7.5	あり
	RDG	52.9	50.1	-2.7	あり
	TTL	152.0	161.1	9.1	あり
共同獣医学部	GRM	79.7	82.6	2.9	なし
	LST	50.6	62.3	11.7	あり
	RDG	77.5	73.5	-4.0	あり
	TTL	207.8	218.5	10.6	あり

1-3 1 年次から 2 年次前期までの成績推移

22 年度から、2 年次前期に教育学部、水産学部、農学部、理学部、工学部の 5 学部で開設されている英語オープン履修者にも、G-TELP 受験を義務付けた。このことで、同一学生を 1 年次前期・後期、2 年次前期の 3 期にわたって追跡調査することが可能となった。この調査結果を、資料 6 と 7 で示している。

資料 6 英語オープン履修者の G-TELP における 3 期平均点推移 (調査対象者:952 名)

セクション	1 年次		2 年次
	23 年度前期	23 年度後期	24 年度前期
GRM	59.0	62.9	62.5
LST	41.1	49.1	47.8
RDG	54.7	51.8	54.8
TTL	154.8	163.8	165.1

資料 7 英語オープン履修者の G-TELP の平均点推移 (調査対象者:952 名)

セクション	23 年度前期 -23 年度後期		23 年度後期 -24 年度前期	
	差	有意差	差	有意差
GRM	3.9	あり	-0.4	なし
LST	8.0	あり	-1.3	なし
RDG	-2.9	あり	3.0	あり
TTL	9.0	あり	1.4	あり

資料 6 から、TTL は受験回数を重ねるごとに伸びが見られる。また、資料 7 から、これら 23 年度前期から後期の伸び (9.0 ポイント) と、23 年度後期から 24 年度前期にかけての TTL の伸び (1.4 ポイント) は、それぞれ統計的に有意差があった (巻末に詳細データを記載)。得点の伸びは、1 年次の 23 年度前期—後期に比べて 2 年次の 23 年度後期—24 年度前期は鈍化している。しかし、英語オープン履修者が所属する学部では、1 年次は英語科目を週 2 科目履修し、2 年次は英語オープンのみ週 1 科目履修する体制となっている点を考慮する必要がある。週 1 回授業の体制でも有意的な伸びが出ており、今後考えられるカリキュラム改編の方向性に関して、一つの参考資料ともなりうると考えられる。

各セクションの点数の推移を見ると、GRM は 23 年度後期—24 年度前期にかけてマイナス 0.4 ポイントで、この下落には有意差は見られなかった。次に、LST は 23 年度後期—24 年度前期にかけてマイナス 1.3 ポイントで、この下落にも有意差は見られなかった。また RDG は、23 年度前期—後期で微減したものの、23 年度後期—24 年度前期では有意差のある向上が見られた。これらの結果の理由は、使用された Form の違いによる可能性やその他の可能性など、今後検証していく必要がある。

1-4 各セクションの得点分布

23 年度と 24 年度のそれぞれの試験について、各セクションの得点分布状況を見ると (データは巻末にまとめて掲載)、両年度とも、GRM は比較的、高得点層に分布が集中している。また、LST の分散は、GRM や RDG に比べて小さい傾向が見られる。LST の素点は 40 点台であるが 8 点上がっている。これは後期の授業の英語コア O でリスニングを取り上げた授業の影響も考えられる。今後は、学生の解答状況をさらに詳細に分析していく必要がある。

1-5 まとめ

前回の報告書 (23 年 3 月) で示した 21 年度、22 年度のデータと比較しても、本学での G-TELP の成績は、23 年度、24 年度とも、大体同じような傾向で推移していることが確認できた。G-TELP 導入直後のこの 5 年間に収集した基礎データを基に、今後は明らかになった課題をひとつひとつ検証し、その結果を、例えば共通教育英語科目の各授業の指導で活かせるように提示し、それが最終的に学生の英語力の向上につながっていく、というように、G-TELP をより体系的な仕組みの中で活用していくことも考えられる。

1-6 G-TELP 導入による評価の平準化の状況について

1-6-1 評価の平準化とは

本学では、1 年次の共通教育英語科目では、個別的試験を 80%、G-TELP を 20% で期末評価を出している。また 22 年度以降、2 年次の共通教育英語科目のひとつである英語オープンクラスでもこの仕組みを導入し

ている。成績評価の対象になる G-TELP のセクションは、科目によって異なる。これは各科目と最も関連性の深いセクションを抽出して評価することによる。例えば資料 8 の各科目で、●のついたセクションを成績評価の対象としている。

資料 8 G-TELP 評価対象セクション(参考:23 年度以降、インテンシブ英語と英語特別演習を廃止)

		G-TELP の 3 つのセクション		
		Grammar (100 点)	Listening (100 点)	Reading & Vocabulary (100 点)
科目名	コア C、C1、C2	●		
	コア U、U1	●	●	●
	コア O		●	
	コア R、R1、R2			●
	英語オープン	*	*	*

*英語オープンクラスについては、各担当教員の申請に基づくセクションを算出。

この仕組みのねらいは、以下の 3 点に要約できる：

- 授業環境・効率の改善と教育成果が客観的に確認できるシステムの構築を目指す。
- 実力テスト（G-TELP）を期末評価の一部として導入することで、教員による評価のバラつき（いわゆる厳しい評価・甘い評価の別）をある程度是正して平準性の高い評価システムを構築する。
- 期末試験対策は当該授業のテキストの学習のみで十分と考える慣習的・旧来的学習観を教員・学生ともに改め、学生に普段の自主学習による実力養成の重要性を認識させる。

GPA 制度導入以来、とくに厳しく求められるようになったのは「評価の平準性・厳格性」という概念である。このことは平成 20 年 3 月に国立大学協会から出された「国立大学の目指すべき方向－自主行動の指針－」の中にもはっきりと打ち出されている方向性である。このような国策的ガイドラインが意味するところは、教員による評価にいわゆる甘い・厳しい、のバラツキがある、という従来型の個別定期試験制度で必ずきかれる声に何らかの形で対処することが、国立大学の今後のあり方として望ましいということである。さらに、習熟度別クラス編成にした際、多くの大学で聞かれるのはいわゆる「単位の質」の問題である。これは端的に言えば、上級クラスの「優」と下位クラスの「優」は同質とはいえないのではないかという、これも裏を返せば、習熟度別クラス編成下での個別定期試験制度に対する疑問もしくは批判と考えられる。

このような単位の質、評価の平準性の問題に関して、G-TELP を 20% 導入によって考えられる評価変動パターンを以下に示して解説する。

資料 9 G-TELP20% 導入によって考えられる評価変動パターン

パターン	学生	(定期試験)	(G-TELP)	期末評価	評価の変動
A	吉田太郎	59 / 80 (= 74 / 100) (良)	14 / 20 (= 70 / 100)	73 / 100 (良)	ゼロ変動
B	佐藤花子	72 / 80 (= 90 / 100) (秀)	9 / 20 (= 45 / 100)	81 / 100 (優)	ダウン変動
C	鈴木一郎	54 / 80 (= 68 / 100) (可)	18 / 20 (= 90 / 100)	72 / 100 (良)	アップ変動

資料 9 は、G-TELP20% の英語成績評価への導入が評価にどのような影響を及ぼすかについて 3 つの考えられるパターンを示している。パターン A は教員による個別定期試験結果が 80 点満点の 59 点であり、これは 100 点満点では 74 点で、秀 (100 ～ 90)、優 (89 ～ 80)、良 (79 ～ 70)、可 (69 ～ 60)、不可 (59 ～) の GPA 制度下では「良」にあたる。このパター

ンでは G-TELP20 点満点で 14 点、これは 100 点満点では 70 点に相当し、トータルでは 73 点となり「良」の評価である。つまりパターン A では、旧来型の定期試験のみの評価と G-TELP 結果を加えた総合評価に変動がないのでこれを「ゼロ変動」と呼ぶことにする。パターン B は教員による個別定期試験結果が 80 点満点の 72 点であり、これは 100 点満点では 90 点で、秀 (100 ～ 90)、優 (89 ～ 80)、良 (79 ～ 70)、可 (69 ～ 60)、不可 (59 ～) の GPA 制度下では「秀」にあたる。ところがこのパターンでは G-TELP は 20 点満点で 9 点、これは 100 点満点では 45 点に相当し、トータルでは 81 点となり「優」の評価である。つまりパターン B では、旧来型の定期試験のみの評価と G-TELP 結果を加えた総合評価との間に下降変動がみられるのでこれを「ダウン変動」と呼ぶことにする。最後に、パターン C は教員による個別定期試験結果が 80 点満点の 54 点であり、これは 100 点満点では 68 点で、秀 (100 ～ 90)、優 (89 ～ 80)、良 (79 ～ 70)、可 (69 ～ 60)、不可 (59 ～) の GPA 制度下では「可」にあたる。ところがこのパターンでは G-TELP は 20 点満点で 18 点で、100 点満点では 90 点に相当し、トータルでは 72 点となり「良」の評価である。つまりパターン C では、旧来型の定期試験のみの評価と G-TELP 結果を加えた総合評価との間に上昇変動がみられるのでこれを「アップ変動」と呼ぶことにする。

1-6-2 G-TELP の導入による評価の平準化の状況：2 年間の動向

以下に、G-TELP20% 評価が英語の期末評価にもたらした影響について述べる。まず、資料 10－資料 13 は、23 年度前期－24 年度後期の結果を示している。基本的に、本学の大半の学部を対象とした結果である。

資料 10 23 年度前期 標本総数 (330 名) の変動パターン別割合

変動パターン	A (ゼロ変動)	B (ダウン変動)	C (アップ変動)
人数とパーセンテージ	136 約 41%	164 約 50%	30 約 9%

資料 11 23 年度後期 標本総数 (254 名) の変動パターン別割合

変動パターン	A (ゼロ変動)	B (ダウン変動)	C (アップ変動)
人数とパーセンテージ	56 約 23%	193 約 76%	1 約 1%

資料 12 24 年度前期 標本総数 (355 名) の変動パターン別割合

変動パターン	A (ゼロ変動)	B (ダウン変動)	C (アップ変動)
人数とパーセンテージ	199 約 56%	148 約 42%	8 約 2%

資料 13 24 年度後期 標本総数 (715 名) の変動パターン別割合

変動パターン	A (ゼロ変動)	B (ダウン変動)	C (アップ変動)
人数とパーセンテージ	342 約 48%	352 約 49%	21 約 3%

23 年度の資料を見ると、ダウン変動が半分以上を占め、ゼロ変動がそれに続く。アップ変動は後期で激減し、わずか 1 パーセント程度となっている。それに対して 24 年度はゼロ変動とダウン変動との間で大きな差はそれほど見られない。アップ変動も微増ながら、2 パーセントから 3 パーセントとなっている。大きな特徴として、ダウン変動の割合は、この 2 年間を見る限り、改善されつつあるように見える。

1-7 学生によるアンケート結果について

23 年度 (2011 年度) 前期・後期、24 年度 (2012 年度) 前期・後期、合計 2 年間 (4 回) にわたる G-TELP 導入後の学生アンケート調査結果を以下に示した (対象者は 1 年生の G-TELP 受験者)。

資料 14 アンケート調査に用いた質問 5 項目

1	英語の成績の一部が G-TELP で評価されるため、普段から英語学習に力を入れた。
2	G-TELP の模擬試験に挑戦するなど、何らかの形で G-TELP の事前学習を行った。
3	G-TELP を受験することで、英語学習に対する目標意識や目的意識が高まる。
4	G-TELP の受験や受験準備を通して、TOEIC, TOEFL, 英検など、G-TELP 以外の外部試験にも挑戦したいという気になった。
5	今回 G-TELP を受験して、英語をもっと積極的に学ぶ必要があると感じた。

資料 15 各質問に対する 2 年間の比較と全体平均

質問項目 1	23 年度前期	23 年度後期	24 年度前期	24 年度後期	全体平均
そう思う	4.60%	4.00%	6.00%	4.20%	4.70%
どちらかといえばそう思う	28.50%	25.10%	30.30%	24.90%	27.20%
どちらかといえばそう思わない	38.20%	39.10%	38.60%	39.20%	38.80%
そう思わない	28.60%	31.80%	25.10%	31.70%	29.30%

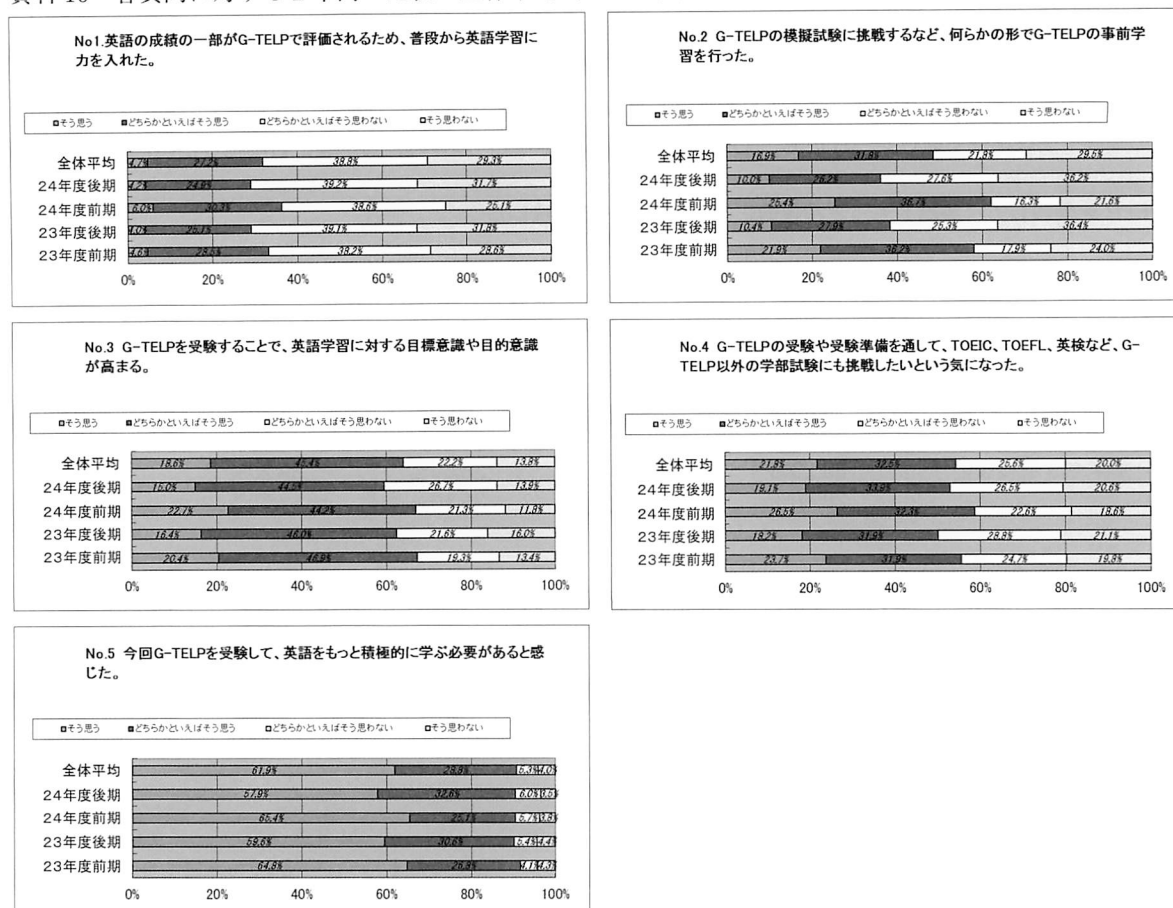
質問項目 2	23 年度前期	23 年度後期	24 年度前期	24 年度後期	全体平均
そう思う	21.90%	10.40%	25.40%	10.00%	16.90%
どちらかといえばそう思う	36.20%	27.90%	36.70%	26.20%	31.80%
どちらかといえばそう思わない	17.90%	25.30%	16.30%	27.60%	21.80%
そう思わない	24.00%	36.40%	21.60%	36.20%	29.50%

質問項目 3	23 年度前期	23 年度後期	24 年度前期	24 年度後期	全体平均
そう思う	20.40%	16.40%	22.70%	15.00%	18.60%
どちらかといえばそう思う	46.90%	46.00%	44.20%	44.50%	45.40%
どちらかといえばそう思わない	19.30%	21.60%	21.30%	26.70%	22.20%
そう思わない	13.40%	16.00%	11.80%	13.90%	13.80%

質問項目 4	23 年度前期	23 年度後期	24 年度前期	24 年度後期	全体平均
そう思う	23.70%	18.20%	26.50%	19.10%	21.80%
どちらかといえばそう思う	31.90%	31.90%	32.30%	33.90%	32.50%
どちらかといえばそう思わない	24.70%	28.80%	22.60%	26.50%	25.60%
そう思わない	19.80%	21.10%	18.60%	20.60%	20.00%

質問項目 5	23 年度前期	23 年度後期	24 年度前期	24 年度後期	全体平均
そう思う	64.80%	59.60%	65.40%	57.90%	61.90%
どちらかといえばそう思う	26.80%	30.60%	25.10%	32.60%	28.80%
どちらかといえばそう思わない	4.10%	5.40%	5.70%	6.00%	5.30%
そう思わない	4.30%	4.40%	3.80%	3.50%	4.00%

資料 16 各質問に対する 2 年間の比較と全体平均（グラフ化）



全体的な傾向として、第一点目は、英語学習に対する平素からの必要性（項目1）、受験に向けた実際の学習準備活動（項目2）、英語学習意欲・学習目的（項目3）、外部試験受験への前向きな態度（項目4）、そして授業時間外での自主的な学習活動（項目5）の全項目において、両年度ともに、前期に比べて後期が数値的に下回っている。つまり学習観、学習行為、そして学習動機づけにまで包括した質問5項目だが、それらすべてにおいて後期で下降するのはなぜだろうか。大半の受験者が1年生である事実から推測した場合、1つには大学受験を終え、学生生活にも慣れ始め、大学英語授業の雰囲気などもわかり始めることによる惰性が考えられる。これは英語のみならず、他教科にもおそらく言えることである。

とくに行動面と情意面との乖離（開き）が大きく表れている。たとえば項目1、2は行動面に関連しているが、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた肯定レベルは、前期から後期にかけて下がっている。後期では合計しても40パーセントに達していない。同様の傾向が情意面を示す他の3項目にもみられる。ただし、これら3項目の肯定レベルは50パーセントをこえ、行動面より高い値となっている。つまり受験者は学習行動をあまりとっておらず、何らかのビジョンをもって英語学習に取り組んでいないことが推測される。気持ちの上ではわかっている、またはわかろうとしているが、実際の行動には結びついていない実態が窺える。これはある面、学習動機づけと学習方法を含めた学習方略の脆弱さを示唆している。つまり、どのような英語学習スタイルを自分自身が納得しながら自律的に構築し、実践していくことができるか（方法論）。そのためには、まず、どのような本質的な英語学習の目的や最終的な目標を確立すべきか（目的論）。この2つのドメイン（領域）の「位置取り」が、各学習者によって真剣に行われなないといけませんが、現実にはどうやらなされていない。方法論と目的論が確立されて始めて、行動への意味づけが可能となってくる。その事実、英語教育のみならず、学習行動を扱った教育心理学の領域でも多くの研究結果として報告されていることは言うまでもない。

これまでの大学受験に向けた学習パターンや学習スタイルでは、大学に入った以上、その方法・目的において無意味に近い存在となる。大学という場での新たな英語学習に対する方法論と目的論が確立される必要

がある。それによって、G-TELP という一つの学習効果を試す指標（手段）の意味も見えてくる。どうすれば「内発的要因」を各学習者が方法論、目的論の構築によって生み出していくことができるか。その点について、今後の G-TELP 受験に向けた学習指導上の対応だけでなく、大学英語授業・学習のあり方について、どのような見直しや新たな取り組みを進めていくべきか、俯瞰的な視点に立ちながら考究していく必要がある。

1-8 学生の Moodle（ムードル）活用状況について



20 年度前期から、本学の学生がオンライン学習で G-TELP 対策ができるよう、Moodle が活用されている。Moodle の G-TELP 模擬試験サイトは、教育センター英語教員の問題作成協力によるもので G-TELP の文法、リスニング、リーディング & ボキャブラリーのセクションにそれぞれ準拠した 4 つの完全テストから成っている。



Moodleとは学習過程管理システム (Course Management System : CMS) である。本学の学生は、全員が1年次のオリエンテーション時に、Moodle へのアクセスについての情報を与えられる。本学在学中に、学生によっては教員が Moodle に投稿した様々な学習資料や課題に取り組むことになる。全体的な Moodle 使用の頻度は、在籍する学部によって大きく異なる可能性があり、この点は指摘しておく必要がある。本学の Moodle は、学内や学外からログイン名とパスワードを使ってアクセス可能な、安全なオンライン学習機能である。アクセスはコンピュータを始めに携帯電話やスマートフォンでも可能である。本学では、水産学部や農学部など理系の学部の方が、他の学部よりも Moodle を利用した教材が充実している傾向にある。従って、Moodle の定期的なアクセス数は、ある分野を学ぶ学生のアクセスが、他の学生に比べて大きく左右している可能性がある。

Moodle での G-TELP 模擬テストは、当初、学生がテスト形式に充分慣れ、レベル 3 の各セクションの難易度に比較的近い内容例を紹介する機会とするために拡充していった。4 つの模擬テストは、各セクションを単独で取り組むことができ、何度でも繰り返すことができ、また異なる順序で行うことができる。それぞれのセクションのスコアは、終了と同時に自動的に表示される。そのため、スコアを向上させたいと思えば、同じテストを何度でも取り組むことができる。

各セクションの解説は、テスト終了後に表示される。例えば文法のセクションでは、正解と短い説明が表示される。リスニングでは完全な台本が表示され、リーディングでは日本語訳が示される。これらの機能は、学生にとって受験前の自己学習として有益なものとなる。実際のテスト形式に従い、この練習問題での全てのセクションへの解答は選択式で、選択肢の順番は受験の度に自動的に入れ替わるようになっている。

資料 17 G-TELP 模擬テストのリスニングセクション問題例

Part 4: You will hear a conversation between two people. First you will hear questions 1 through 6. Then you will hear the conversation. Choose the best response to each question in the time provided.

You may take notes when you listen to the questions and passage.

Listen

(矢印をクリックしてください。ダウンロードするには右クリックで保存)

19

得点: --/1

1つの答えを選択してください。

☐ a. She is going there on holiday

☐ b. She is going to relatives

☐ c. She lives there

☐ d. She is going on a business trip

Moodle 使用によって、サイト管理者は G-TELP 対策模擬テストに関して様々なデータを集めることが可能である。それらのデータは学生個人成績、集団成績、テスト問題ごとのスコア分析、各学部 of 学生のアクセス件数など多岐にわたっている。

資料 18 G-TELP 対策模擬テストでの回答分析例

アイテム分析テーブル ②					
問題ID	問題テキスト	解答テキスト	部分点	解答数	解答%
test3-16 : (28461)	Canadians generally travel between cities by car, bus or plane. Planes usually _____ less time than other methods of travel.	take	(1.00)	136/161	(84%)
		took	(0.00)	5/161	(3%)
		are taking	(0.00)	2/161	(1%)
		have taken	(0.00)	11/161	(7%)

以下の表は 20 年度以降の各学部の G-TELP 対策模擬テストへのアクセス件数を示したものである。(注：アクセス件数 1 件が表わすのは、文法などの一つのテスト部門へのアクセスであり、テスト問題全体へのアクセスではない。)

資料 19 G-TELP 対策模擬テストへの学生のアクセス件数

学部	20 年度前期	20 年度後期	21 年度前期	21 年度後期	22 年度前期	22 年度後期	23 年度前期	23 年度後期	24 年度前期	24 年度後期
法文	1053	458	1461	745	1370	629	1147	597	1094	380
教育	458	216	827	213	569	126	795	316	731	181
理学部	299	166	509	155	344	119	296	134	461	164
医学部	463	115	569	255	536	141	625	182	628	87
歯学部	204	15	114	13	107	5	106	24	83	2
工学部	995	279	1157	292	908	214	936	309	1324	317
農学部	422	282	641	214	845	392	616	225	815	262
水産学部	241	164	250	101	307	144	397	296	516	139
2 年生他	×	×	223	154	1114	×	648	×	644	×
*Listen up 全	×	×	×	154	159	37	197	250	×	×
獣医学科 山大									136	86
獣医学科 鹿大									133	104
合計：	4135 件	1695 件	5751 件	2142 件	6259 件	1807 件	5763 件	2333 件	6565 件	1722 件
前期後期比較		59%減		63%減 (注 61%減)		72%減 (注 65%減)		60%減 (注 49%減)		74%減 (注 68%減)

* Listen up は追加されたリスニング問題である。
(注：ここでのパーセンテージの下落は 1 年生のものであり、2 年生は含んでいない)

20 年度から 24 年度までに実施された 10 回の G-TELP テストに関して、G-TELP 対策模擬テストは実際のテスト実施の約 1 カ月前からテスト期間中にかけて学生に対してオンラインでアクセス可能な状況にしている。この期間中、教育センターは積極的に G-TELP 対策模擬テストにアクセスするように学生に働きかけている。それは、すべての英語教員に情報を伝えたり、G-TELP 受験予定者全員に G-TELP や G-TELP 対策模擬テストのサイトについて一斉メールで配信したり、大学のキャンパスの各所に Moodle G-TELP サイトに関する情報ポスターを掲示したりして実施している。教員の一部は、パソコンを使った授業を活用し、教室の中で G-TELP のサイトにアクセスして、実際のテスト実施日直前まで学生に周知し続けているという状況もある。これに加えて、20 年度前期の初期段階で、G-TELP サイト管理者は、英語コア U（総合）クラスのほとんどを訪れて学生と教員を対象に簡略なオリエンテーションを実施して、Moodle へのログイン

ン方法を習熟させ、G-TELP 対策模擬テストについて周知をはかった。

資料に見られるとおり、過去 5 年度分を振り返ってみると、前期から後期にかけてのアクセス数に大きな落差が見られる。G-TELP の総合スコア成績自体は、5 年間を通じて、前期から後期にかけてどの年も伸びており、そうした伸びには影響はないものの、毎年度、前期に比べ、後期にアクセス数が少なくなるのは、教育センターとしては、懸念材料である。この要因に関してはいろいろな意見があるであろうが、特に 24 年度前期から後期にかけてのアクセス数が 68% 落ちたことの要因や改善方策の視点として、次のような点があげられる。

- 24 年度後期の G-TELP 試験対策用オンライン学習に関する注意喚起と奨励の呼びかけが 29 日前あたりであった。したがって、通常の日程どおり G-TELP 試験の 1 カ月ほど前から行われていたが、この期間は大学祭の日程等と重なり、多少影響があった可能性がある。
- 24 年度後期の G-TELP 受験に際し、学生の前向きな動機づけの低下が考えられる。前期は、初めての受験ということもあり、動機づけは高く、テスト自体やその準備学習への興味関心も高かったと思われるというのが、多くの教員のみるところである。
- 24 年度前期の G-TELP 試験結果が芳しくなかった学生の中には、後期の受験に対する準備意欲が低下した学生もいた可能性がある。
- 24 年度に教員の異動などのため、授業で Moodle をよく使用する教員の減少傾向がある。
- 英語の各クラス担当教員の側で、Moodle を使って行う事前学習に関する認識にかなりのばらつきがあった可能性がある。予備学習サイトや担当クラスの習熟度別レベルを踏まえた奨励方法などの面で、適切な指導ができていたかどうか、反省する余地があるかもしれない。
- 24 年度に、一部の学生が Moodle の代わりに ALC Net Academy 2 を G-TELP の事前学習に使用していた。
- より興味深く、やってためになる事前学習の中身（Moodle 上での提供物）となるように、G-TELP の模擬試験や解説の提供の仕方に、さらなる工夫の余地があるであろう。

こうした点は、幾らか主観的な面もあるかもしれないが、今後さらに検討してみなければならない。後期にアクセス数が落ちる現象を洞察するには、学生が G-TELP 対策問題をどうみているか、ならびに英語学習に対する態度や動機付けについて、詳細に考察する必要があるであろう。

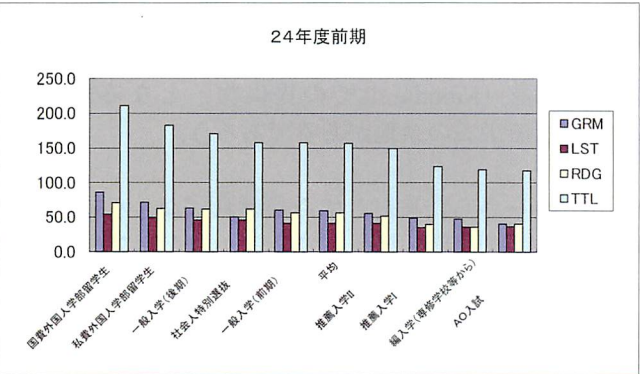
毎回の G-TELP 受験者数がおおよそ 2000 人おり、Moodle 上での G-TELP 事前学習が強制ではなく、自主性によって行われる点を考慮すれば、アクセス件数は総じて、学生達の英語学習におけるかなりの健闘を示す数字とも言える。

2. 入学区分と G-TELP の相関について

以下に、本学の入学区分と G-TELP（24 年度前期・後期実施分）の相関について見てみる。入試区分については、推薦入学はセンター試験を課さないⅠと、センター試験を課すⅡがある。AO 入試は理学部の中の 3 学科と水産学部の中の 1 学科のみで行なわれている。社会人特別選抜は教育学部の生涯教育総合課程の中の 2 専修が対象となっている。資料 20 を見ると、外国人留学生の得点が上位を占めていることがわかる。推薦入学で言えば、センター試験を課すⅡのほうがセンター試験を課さないⅠを総得点で上回っている。G-TELP 受験者総数は、前期・後期ともに受験した学生の総数 1727 名を対象としている。総数に占める割合が入試区分によって相当ばらつきがあるため、ここでの順位はあくまで参考ということになる。

資料 20 24 年度前期

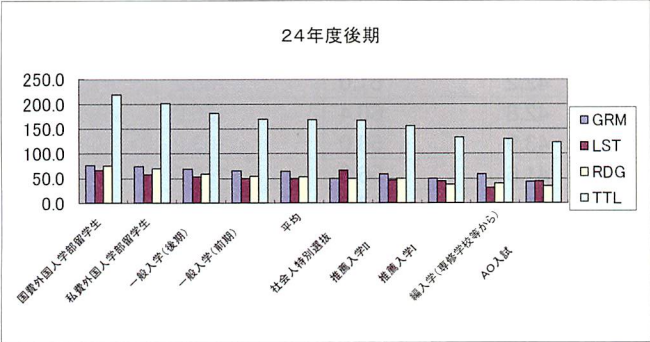
順位	入学区分名称	割合 (%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	国費外国人学部留学生	0.10%	86.0	54.0	71.0	211.0
2	私費外国人学部留学生	0.30%	71.3	49.3	62.2	182.8
3	一般入学（後期）	13.40%	63.6	45.6	61.5	170.7
4	社会人特別選抜	0.10%	50.0	46.0	62.0	158.0
5	一般入学（前期）	71.60%	60.3	41.0	56.6	157.9
6	平均	100.00%	59.7	41.4	56.1	157.2
7	推薦入学Ⅱ	9.70%	55.9	41.3	52.2	149.4
8	推薦入学Ⅰ	3.50%	48.9	34.8	39.4	123.1
9	編入学（専修学校等から）	0.10%	47.5	35.5	35.5	118.5
10	AO入試	1.20%	40.0	36.3	40.6	117.0



資料 21 にあるように、24 年度後期についても前期とほぼ同様の総得点順位になっている。前期と異なるのは、社会人特別選抜と一般入学（前期）の順位が入れ替わった点である。

資料 21 24 年度後期

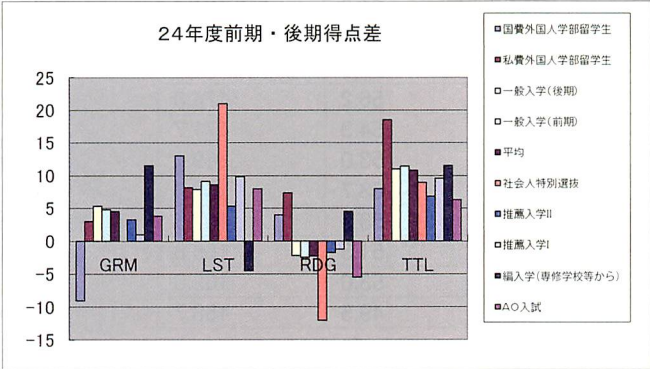
順位	入学区分名称	割合 (%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	国費外国人学部留学生	0.10%	77.0	67.0	75.0	219.0
2	私費外国人学部留学生	0.30%	74.3	57.5	69.5	201.3
3	一般入学（後期）	13.40%	68.9	53.5	59.3	181.7
4	一般入学（前期）	71.60%	65.1	50.1	54.1	169.3
5	平均	100.00%	64.3	50.0	53.7	168.0
6	社会人特別選抜	0.10%	50.0	67.0	50.0	167.0
7	推薦入学Ⅱ	9.70%	59.2	46.6	50.5	156.3
8	推薦入学Ⅰ	3.50%	49.9	44.6	38.2	132.7
9	編入学（専修学校等から）	0.10%	59.0	31.0	40.0	130.0
10	AO入試	1.20%	43.9	44.3	35.1	123.3



資料 22 は、24 年度前期・後期の得点差を表わしている。この表で注目すべきは、私費外国人学部留学生の伸びが一番大きく、編入学（専修学校等から）と一般入学（前期・後期）の伸びが全体の平均を上回っている点である。前期・後期ともに総得点で 1 位だった国費外国人学部留学生の伸びが顕著でなかったのは、可能性として、いわゆる学習高原状態になっていることが考えられる。

資料 22 24 年度前期・後期得点差

順位	入学区分名称	割合（％）	GRM	LST	RDG	TTL
1	私費外国人学部留学生	0.30％	3.0	8.2	7.3	18.5
2	編入学（専修学校等から）	0.10％	11.5	-4.5	4.5	11.5
3	一般入学（前期）	71.60％	4.8	9.1	-2.5	11.4
4	一般入学（後期）	13.40％	5.3	7.9	-2.2	11.0
5	平均	100.00％	4.5	8.6	-2.3	10.8
6	推薦入学Ⅰ	3.50％	1.0	9.8	-1.2	9.6
7	社会人特別選抜	0.10％	0.0	21.0	-12.0	9.0
8	国費外国人学部留学生	0.10％	-9.0	13.0	4.0	8.0
9	推薦入学Ⅱ	9.70％	3.3	5.3	-1.7	6.9
10	ＡＯ入試	1.20％	3.9	8.0	-5.5	6.3



以上、入学区分と G-TELP の相関についてみてきたが、今回が 2 度目の調査となる。年度によって傾向を同じくする面と異なる面とがあるように思われる。これらの点についてはデータを累積しながら、今後、より詳細な検討が必要である。本学のアドミッション・ポリシーにとっても参考になるものと思われる。

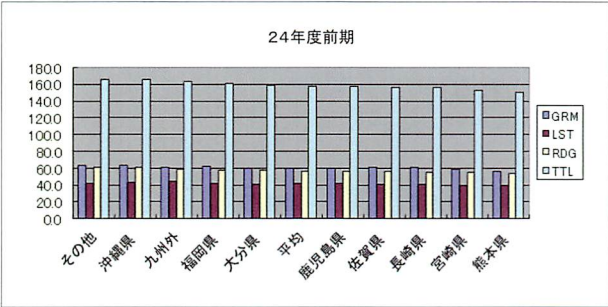
3. 出身県別区分と G-TELP の相関について

以下に、本学入学生の出身県別区分と G-TELP（参考：24 年度前期・後期実施分）スコアとの関係について見てみる（この表の中で「その他」は外国人留学生を指す）。

資料 23 を見ると、外国人留学生の得点が日本人学生をわずかに上回っていることがわかる。日本人学生では沖縄が 1 位となっている。九州に限って言えば、1 位福岡、2 位大分で、地元である鹿児島は 3 位（全体順位では 6 位）となっている。ここでも、総数に占める各区分の割合に相当ばらつきが見られるため、順位は参考程度ということになる。

資料 23 24 年度前期

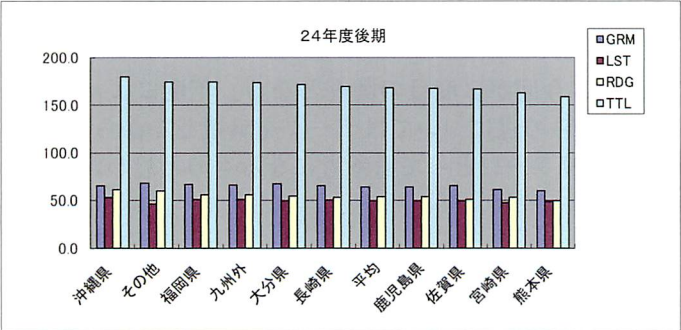
全体順位	地区②	割合 (%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	その他	0.50%	63.0	42.2	61.0	166.2
2	沖縄県	0.70%	62.8	42.8	60.4	166.0
3	九州外	9.50%	61.2	43.9	58.0	163.2
4	福岡県	8.90%	62.3	41.6	56.8	160.8
5	大分県	3.10%	59.8	41.1	57.3	158.2
6	平均	100.00%	59.7	41.4	56.1	157.2
7	鹿児島県	54.30%	59.5	41.6	56.0	157.1
8	佐賀県	2.60%	60.4	40.1	55.8	156.4
9	長崎県	4.90%	60.9	40.4	54.8	156.1
10	宮崎県	6.80%	58.7	39.1	54.6	152.5
11	熊本県	8.60%	56.4	39.7	54.0	150.2



続いて、資料 24 を見ると、後期は多少の順位の入れ替わりが見られる。鹿児島県は全体平均にほぼ近い(佐賀、宮崎、熊本は平均を下回っている)。

資料 24 24 年後期

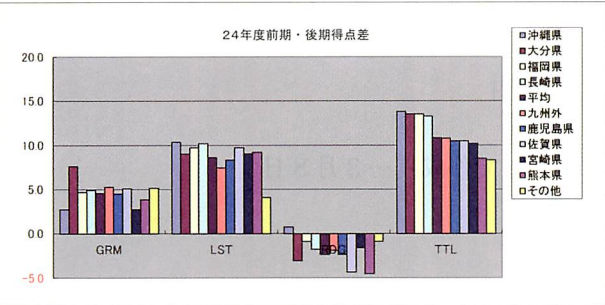
全体順位	地区②	割合 (%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	沖縄県	0.70%	65.6	53.1	61.2	179.8
2	その他	0.50%	68.1	46.3	60.1	174.6
3	福岡県	8.90%	67.0	51.4	55.9	174.3
4	九州外	9.50%	66.5	51.4	56.2	174.0
5	大分県	3.10%	67.4	50.1	54.3	171.7
6	長崎県	4.90%	65.8	50.5	53.0	169.4
7	平均	100.00%	64.3	50.0	53.7	168.0
8	鹿児島県	54.30%	64.0	49.9	53.7	167.5
9	佐賀県	2.60%	65.5	49.8	51.5	166.8
10	宮崎県	6.80%	61.5	48.1	53.0	162.6
11	熊本県	8.60%	60.3	48.9	49.5	158.7



資料 25 は前期・後期の得点差を表わしている。これを見ると、地区に拘らず、およそ 8 点から 14 点の幅で総合点が伸びている。ただし、RDG（読解）については、沖縄を除きすべての地区が、若干ではあるが、下降気味の傾向を示している。

資料 25 24 年度前期・後期の得点差

順位	地区②	割合 (%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	沖縄県	0.70%	2.7	10.3	0.8	13.8
2	大分県	3.10%	7.6	9.0	-3.1	13.5
3	福岡県	8.90%	4.7	9.7	-0.9	13.5
4	長崎県	4.90%	4.9	10.2	-1.8	13.3
5	平均	100.00%	4.5	8.6	-2.3	10.8
6	九州外	9.50%	5.2	7.4	-1.9	10.8
7	鹿児島県	54.30%	4.5	8.3	-2.4	10.4
8	佐賀県	2.60%	5.1	9.7	-4.3	10.4
9	宮崎県	6.80%	2.7	9.0	-1.6	10.2
10	熊本県	8.60%	3.8	9.2	-4.5	8.5
11	その他	0.50%	5.1	4.1	-0.9	8.3



以上、本学の入学生の出身県別 G-TELP 関連を見てきたが、出身県別の入学生のレベルについて、参考程度ではあるが、ある程度示唆するところがあるものと考えられる。この調査も今回が 2 度目であるが、今後の動向を知る上でも引き続き調査を進めていく考えである。

4. 英語アチーブメントテスト表彰制度とその運用状況について

4-1 教育センター英語アチーブメントテスト（G-TELP）表彰制度

本学では、22 年度より教育センターが実施する共通教育科目のうち、外国語科目における学生の英語力判定のための共通実力テスト（G-TELP、以下「英語アチーブメントテスト」という）において、優秀な成績を収めた学生に対する表彰制度を設けている。

その目的は、学生の英語学習動機を高め、より高い英語力を目指そうとする向学心を涵養するための契機として、本学における英語教育の質の向上に資するものである。

表彰の対象は、1 年次後期に実施する英語アチーブメントテストにおいて、優秀な成績を収め、次の各号に該当する学生（以下「受賞者」という）に対し、教育センター長が表彰を行う。(1) 各学部の成績最上位者 1 名に対し、優秀賞を授与する。(2) 前期得点と比較して後期得点の向上が顕著と認められる者で、各学部上位者 2 名に対し、努力賞を授与する。優秀賞及び努力賞は、同一の者に対して授与することができる。

受賞者は、教育センター外国語教育推進部会において選考し、教育センター会議において決定する。なお、優秀賞と努力賞の学生には、表彰状とともに副賞として図書カードが渡される。

4-2 過去 3 年間の英語アチーブメントテスト（G-TELP）の表彰実施体制

本学では、22 年度からこの英語アチーブメントテストの表彰式を実施してきており、以下に過去 3 年間の流れを示す。

22 年度

- ①表彰までの流れを決める（第 7 回外国語教育推進部会）…11 月 12 日
- ② G-TELP 実施…12 月 13 日～ 12 月 17 日
- ③スコアレポート返却後、表彰候補者の選出… 1 月中旬
（1 月中旬に G-TELP 側から候補者データ受領）

- ④部会で審議し、表彰者選出（第9回外国語教育推進部会）…1月20日
- ⑤教育センター会議で決定…1月28日
- ⑥該当の学部及び学生へ通知、賞状の作成（賞状は教育センターで作成）…2月4日
- ⑦表彰…2月9日

23 年度

- ① G-TELP 実施 …12月12日～12月16日
- ②表彰までの流れを決める（1月の部会で審議）…1月12日
- ③スコアレポート返却後、表彰候補者の選出 …1月中旬
（1月中旬に G-TELP 側から候補者データ受領）
- ④表彰者候補者について部会で審議し、表彰者選出…2月10日
（第10回外国語教育推進部会）
- ⑤表彰候補者について教育センター会議で決定…2月23日
- ⑥副賞の授与について部会で審議し、決定…2月29日～3月2日
（第11回外国語教育推進部会）
- ⑦該当の学部及び学生へ通知、賞状の作成（賞状は教育センターで作成）…3月8日
- ⑧表彰…4月11日

24 年度

- ① G-TELP 実施…12月10日～12月14日
- ②表彰候補者の選出（G-TELP 側から候補者データ受領）…1月上旬
- ③表彰候補者及び副賞、表彰までの実施体制について部会で審議し、表彰者選出
（第11回外国語教育推進部会メール会議）…1月16日～1月22日
- ④教育センター会議で決定…1月25日
- ⑤該当の学部及び学生へ通知、賞状の作成（賞状は教育センターで作成）…1月28日
- ⑥表彰…2月12日

このように見ていくと、23年度のみ表彰が次年度に実施されている。これは、表彰候補者について部会での審議および表彰者選出が遅かったためである。24年度は、後期スコアが返されて、学生にテストを受けた実感のあるうちに表彰することができた。

また、表彰された学生に、インフォーマルなインタビューを行なった結果、このように表彰されることや副賞をもらえることは、嬉しく、また、英語を学ぶ励みになるとの意見が聞かれた。

5. 結語 - 23年度と24年度の2年間の総括と今後の展望

20年度以来、本学で実践している英語教育改革も5年が経過し、改革に係わる様々なデータ蓄積が進んでおり、それらは23年度と24年度を中心に、本報告書でも随所で紹介している。

改革状況の可視化が大きく進捗したのは一つには、共通アチーブメントテスト（G-TELP）の導入によるところが多い。個別定期試験との混合評価にこのテストを活用したこともあり、25年度からはこの受験料が大学による全額負担となる見通しである。継続的に安定した財政支援のもとで、このようなアチーブメントテストをさらに有効活用することが求められている。この5年間の試験結果はスコアレポートという形で各受験者に返却され、その後の英語学習のヒントを少なからず提供してきたはずである。しかし他方で、その結果の組織的な活用は、残念ながら、必ずしも推進されてきたとはいえない。今後は、20年度から指摘されてはいたものの、まだ組織的に着手されたとはいえない、学生の英語力弱点補強の研究と対策、そしてその効果の検証に取り組むことが期待されている。同様に、当該領域混合による英語期末成績評価が、学生や教員にもたらす意識変化がどのようなものであるのか、その研究と検証も忘れてはならないものである。これらは今後を展望する上での重要な柱のひとつとなる。

今回、報告でも初めて触れたように、英語アチーブメントテストの成績をもとにした表彰制度が、学生た

ちへの英語学習奨励に少なからぬ効果を発揮していると考えられる。自立的に学習に取り組む習慣付けに一層の拍車をかけていきたいと願う。

最後になるが、本報告書の執筆は、項目ごとに下記の鹿児島大学教育センター教員がそれぞれ分担した。
(敬称略)

1. 1-1 ～ 1-5：原 隆幸・高橋 玄一郎
1-6：John Tremarco・金岡 正夫
1-7：金岡 正夫
1-8：Anne Brasier
2. 高橋 玄一郎
3. 金岡 正夫
4. 原 隆幸

また、G-TELP 結果のデータ作成に当たっては、G-TELP 日本事務局の福井拓氏にご尽力いただきました。ここに記し、深く感謝申し上げます。

卷末データ

資料 2 (p2) の詳細データ

- 検定方法：t - 検定（一对の標本による平均の検定ツール）
 - 実施テスト：G-TELP 前期 6 月実施（Form310） 後期 12 月実施（Form317）
 - 対象者：23 年度の G-TELP を前期（6 月）、後期（12 月）ともに受験した全受験生
 - 帰無仮説：「前期試験の平均点と後期試験の平均点には有意差は無い」
 - 判断基準
 - P（T<=t）両側<有意水準（0.05）⇒棄却⇒「有意差が無い」とはいえない⇒有意差が有る
 - P（T<=t）両側>有意水準（0.05）⇒採択⇒有意差が無い
- ※両側検定にて判断

■ T T L			
	前期	後期	平均点差
平均	159.4	168.2	8.9
分散	1123.904	1134.629	
観測数	1734	1734	
ピアソン相関	0.699440308		
仮説平均との差異	0		
自由度	1733		
t	-14.19976123		
P（T<=t）片側	1.12609E-43		
t 境界値 片側	1.645733367		
P（T<=t）両側	2.25218E-43		
t 境界値 両側	1.961333757		
検定結果			
P（T<=t）両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T			
	前期	後期	平均点差
平均	41.71395617	49.79238754	8.1
分散	152.5367122	161.6521982	
観測数	1734	1734	
ピアソン相関	0.357755459		
仮説平均との差異	0		
自由度	1733		
t	-23.67854633		
P（T<=t）片側	6.3812E-108		
t 境界値 片側	1.645733367		
P（T<=t）両側	1.2762E-107		
t 境界値 両側	1.961333757		
検定結果			
P（T<=t）両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M			
	前期	後期	平均点差
平均	60.93944637	64.62226067	3.7
分散	274.6628055	229.2138377	
観測数	1734	1734	
ピアソン相関	0.538520015		
仮説平均との差異	0		
自由度	1733		
t	-10.0331052		
P（T<=t）片側	2.29094E-23		
t 境界値 片側	1.645733367		
P（T<=t）両側	4.58187E-23		
t 境界値 両側	1.961333757		
検定結果			
P（T<=t）両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G			
	前期	後期	平均点差
平均	56.71107266	53.83448674	-2.9
分散	205.9482097	236.0343322	
観測数	1734	1734	
ピアソン相関	0.60023122		
仮説平均との差異	0		
自由度	1733		
t	8.995803828		
P（T<=t）片側	2.99867E-19		
t 境界値 片側	1.645733367		
P（T<=t）両側	5.99733E-19		
t 境界値 両側	1.961333757		
検定結果			
P（T<=t）両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

資料 3 (p2)の詳細データ

- 検定方法：t－検定（一対の標本による平均の検定ツール）
- 実施テスト：G-TELP 前期 6 月実施（Form310） 後期 12 月実施（Form317）
- 対象者：24 年度の G-TELP を前期（6 月）、後期（12 月）ともに受験した全受験生
- 帰無仮説：「前期試験の平均点と後期試験の平均点には有意差は無い」
- 判断基準
P（T<=t） 両側<有意水準（0.05）⇒ 棄却 ⇒ 「有意差が無い」とはいえない ⇒ 有意差が有る
P（T<=t） 両側>有意水準（0.05）⇒ 採択 ⇒ 有意差が無い
※両側検定にて判断

■ T T L			
	前期	後期	平均点差
平均	157.2	168.0	10.8
分散	1088.716	1153.661	
観測数	1727	1727	
ピアソン相関	0.693845006		
仮説平均との差異	0		
自由度	1726		
t	-17.13826475		
P（T<=t）片側	3.15824E-61		
t 境界値 片側	1.645736937		
P（T<=t）両側	6.31649E-61		
t 境界値 両側	1.961339316		
検定結果			
P（T<=t）両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M			
	前期	後期	平均点差
平均	59.72611465	64.26462073	4.5
分散	250.6242481	241.3743154	
観測数	1727	1727	
ピアソン相関	0.551527192		
仮説平均との差異	0		
自由度	1726		
t	-12.69585402		
P(T<=t) 片側	1.12795E-35		
t 境界値 片側	1.645736937		
P(T<=t) 両側	2.2559E-35		
t 境界値 両側	1.961339316		
検定結果			
P（T<=t）両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T			
	前期	後期	平均点差
平均	41.3850608	49.9924725	8.6
分散	156.0874476	168.1836049	
観測数	1727	1727	
ピアソン相関	0.361257252		
仮説平均との差異	0		
自由度	1726		
t	-24.84941697		
P(T<=t) 片側	4.4159E-117		
t 境界値 片側	1.645736937		
P(T<=t) 両側	8.8319E-117		
t 境界値 両側	1.961339316		
検定結果			
P（T<=t）両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G			
	前期	後期	平均点差
平均	56.05558772	53.72032426	-2.3
分散	205.0606394	227.0150154	
観測数	1727	1727	
ピアソン相関	0.573289643		
仮説平均との差異	0		
自由度	1726		
t	7.141000104		
P(T<=t) 片側	6.80029E-13		
t 境界値 片側	1.645736937		
P(T<=t) 両側	1.36006E-12		
t 境界値 両側	1.961339316		
検定結果			
P（T<=t）両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

＜検定結果＞
平成 24 年度の G-TELP の前期試験と後期試験の平均点の差を t－検定を用いて検証した。

結果としては、TTL（+ 10.8）、G R M（+ 4.5）、LST（+ 8.6）、RDG（－ 2.3）というそれぞれの項目の前期試験から後期試験に掛けての平均点の差（推移）のうち、TTL、GRM、LST、RDG のすべての差には「有意差がある」との結果となった。
「有意差」とは、「偶然に起こる可能性が極めて少ない差」、「意味のある差」であり、今回でいえば、「受験者の英語能力に、意味のある明確な差」があったということである。

上記を踏まえると今回の G-TELP 結果から
GRM、LST では受験者の有意差をもって、英語能力が向上した。逆に RDG では英語能力が若干低下した。総合的（TTL）には、受験者の英語能力は向上したと統計的に云うことができる。

資料 4 (p3)の詳細データ

- 検定方法：t-検定（一対の標本による平均の検定ツール）
- 実施テスト：G-TELP 前期 6 月実施（Form310）後期 12 月実施（Form317）
- 対象者：23 年度の G-TELP を前期（6 月）、後期（12 月）ともに受験した全受験生
- 帰無仮説：「前期試験の平均点と後期試験の平均点には有意差は無い」
- 判断基準
P（T<=t）両側<有意水準（0.05）⇒ 棄却 ⇒ 「有意差が無い」とはいえない ⇒ 有意差が有る
P（T<=t）両側>有意水準（0.05）⇒ 採択 ⇒ 有意差が無い
※両側検定にて判断

医学部（医学科）

■ T T L			
	前期	後期	平均点差
平均	211.1	222.3	11.2
分散	454.549	432.899	
観測数	53	53	
ピアソン相関	0.479372825		
仮説平均との差異	0		
自由度	52		
t	-3.788981195		
P(T<=t) 片側	0.000197197		
t 境界値 片側	1.674689154		
P(T<=t) 両側	0.000394394		
t 境界値 両側	2.006646761		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T			
	前期	後期	平均点差
平均	54.41509434	64.71698113	10.3
分散	126.2089985	100.0914369	
観測数	53	53	
ピアソン相関	0.077376478		
仮説平均との差異	0		
自由度	52		
t	-5.188933388		
P(T<=t) 片側	1.77203E-06		
t 境界値 片側	1.674689154		
P(T<=t) 両側	3.54407E-06		
t 境界値 両側	2.006646761		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M			
	前期	後期	平均点差
平均	80.24528302	83.09433962	2.8
分散	136.9963716	90.81785196	
観測数	53	53	
ピアソン相関	0.395119279		
仮説平均との差異	0		
自由度	52		
t	-1.75504747		
P(T<=t) 片側	0.042570672		
t 境界値 片側	1.674689154		
P(T<=t) 両側	0.085141345		
t 境界値 両側	2.006646761		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ R D G			
	前期	後期	平均点差
平均	76.43396226	74.47169811	-2.0
分散	77.63497823	96.29245283	
観測数	53	53	
ピアソン相関	0.397273843		
仮説平均との差異	0		
自由度	52		
t	1.39260204		
P(T<=t) 片側	0.084833231		
t 境界値 片側	1.674689154		
P(T<=t) 両側	0.169666463		
t 境界値 両側	2.006646761		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ T T L			
	前期	後期	平均点差
平均	169.3	175.3	6.0
分散	605.561	627.315	
観測数	93	93	
ピアソン相関	0.459308307		
仮説平均との差異	0		
自由度	92		
t	-2.257000415		
P(T<=t) 片側	0.013187467		
t 境界値 片側	1.661585397		
P(T<=t) 両側	0.026374934		
t 境界値 両側	1.986086272		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T			
	前期	後期	平均点差
平均	42.31182796	49.31182796	7.0
分散	113.9777934	140.8038803	
観測数	93	93	
ピアソン相関	0.115656694		
仮説平均との差異	0		
自由度	92		
t	-4.495594964		
P(T<=t) 片側	1.0088E-05		
t 境界値 片側	1.661585397		
P(T<=t) 両側	2.01759E-05		
t 境界値 両側	1.986086272		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ T T L			
	前期	後期	平均点差
平均	156.6	164.4	7.8
分散	943.635	1003.035	
観測数	255	255	
ピアソン相関	0.667219307		
仮説平均との差異	0		
自由度	254		
t	-4.866848887		
P(T<=t) 片側	9.96489E-07		
t 境界値 片側	1.650874792		
P(T<=t) 両側	1.99298E-06		
t 境界値 両側	1.969347483		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T			
	前期	後期	平均点差
平均	41.92156863	48.49411765	6.6
分散	149.348155	134.2509495	
観測数	255	255	
ピアソン相関	0.250983662		
仮説平均との差異	0		
自由度	254		
t	-7.199506061		
P(T<=t) 片側	3.41149E-12		
t 境界値 片側	1.650874792		
P(T<=t) 両側	6.82298E-12		
t 境界値 両側	1.969347483		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M			
	前期	後期	平均点差
平均	66.24731183	67.72043011	1.5
分散	235.7751286	166.9209911	
観測数	93	93	
ピアソン相関	0.445418039		
仮説平均との差異	0		
自由度	92		
t	-0.945048936		
P(T<=t) 片側	0.173554655		
t 境界値 片側	1.661585397		
P(T<=t) 両側	0.34710931		
t 境界値 両側	1.986086272		
検定結果 P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択 平均点の差は有意差は無い			

■ R D G			
	前期	後期	平均点差
平均	60.74193548	58.31182796	-2.4
分散	144.7587658	160.8690977	
観測数	93	93	
ピアソン相関	0.316644875		
仮説平均との差異	0		
自由度	92		
t	1.621091105		
P(T<=t) 片側	0.054210316		
t 境界値 片側	1.661585397		
P(T<=t) 両側	0.108420633		
t 境界値 両側	1.986086272		
検定結果 P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択 平均点の差は有意差は無い			

■ G R M			
	前期	後期	平均点差
平均	59.15686275	63.01176471	3.9
分散	237.7469507	217.0037981	
観測数	255	255	
ピアソン相関	0.568377413		
仮説平均との差異	0		
自由度	254		
t	-4.390835856		
P(T<=t) 片側	8.2906E-06		
t 境界値 片側	1.650874792		
P(T<=t) 両側	1.65812E-05		
t 境界値 両側	1.969347483		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G			
	前期	後期	平均点差
平均	55.55294118	52.88627451	-2.7
分散	187.7993516	222.7153621	
観測数	255	255	
ピアソン相関	0.593977781		
仮説平均との差異	0		
自由度	254		
t	3.289663451		
P(T<=t) 片側	0.00057254		
t 境界値 片側	1.650874792		
P(T<=t) 両側	0.00114508		
t 境界値 両側	1.969347483		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	145.9	155.5	9.7
分散	863.898	918.740	
観測数	449	449	
ピアソン相関	0.582859077		
仮説平均との差異	0		
自由度	448		
t	-7.517095421		
P(T<=t) 片側	1.53867E-13		
t 境界値 片側	1.648261985		
P(T<=t) 両側	3.07735E-13		
t 境界値 両側	1.965273244		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	38.54120267	46.38530067	7.8
分散	137.958678	155.4650513	
観測数	449	449	
ピアソン相関	0.330703065		
仮説平均との差異	0		
自由度	448		
t	-11.85545153		
P(T<=t) 片側	1.09017E-28		
t 境界値 片側	1.648261985		
P(T<=t) 両側	2.18034E-28		
t 境界値 両側	1.965273244		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	195.8	202.2	6.4
分散	506.429	707.763	
観測数	16	16	
ピアソン相関	0.743350227		
仮説平均との差異	0		
自由度	15		
t	-1.416411677		
P(T<=t) 片側	0.088543301		
t 境界値 片側	1.753050325		
P(T<=t) 両側	0.177086601		
t 境界値 両側	2.131449536		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	44.0625	50.75	6.7
分散	125.7958333	143.1333333	
観測数	16	16	
ピアソン相関	0.524773556		
仮説平均との差異	0		
自由度	15		
t	-2.36350369		
P(T<=t) 片側	0.016012851		
t 境界値 片側	1.753050325		
P(T<=t) 両側	0.032025701		
t 境界値 両側	2.131449536		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	55.24721604	60.14922049	4.9
分散	217.4499085	195.8058085	
観測数	449	449	
ピアソン相関	0.395494965		
仮説平均との差異	0		
自由度	448		
t	-6.568898877		
P(T<=t) 片側	7.0447E-11		
t 境界値 片側	1.648261985		
P(T<=t) 両側	1.40894E-10		
t 境界値 両側	1.965273244		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	52.07126949	49.00222717	-3.1
分散	169.9056236	195.7834772	
観測数	449	449	
ピアソン相関	0.494020578		
仮説平均との差異	0		
自由度	448		
t	4.774993099		
P(T<=t) 片側	1.21906E-06		
t 境界値 片側	1.648261985		
P(T<=t) 両側	2.43811E-06		
t 境界値 両側	1.965273244		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	80.9375	80.375	-0.6
分散	146.9958333	153.45	
観測数	16	16	
ピアソン相関	0.737019482		
仮説平均との差異	0		
自由度	15		
t	0.253044701		
P(T<=t) 片側	0.401834393		
t 境界値 片側	1.753050325		
P(T<=t) 両側	0.803668786		
t 境界値 両側	2.131449536		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	70.8125	71.0625	0.3
分散	64.69583333	142.8625	
観測数	16	16	
ピアソン相関	0.515358993		
仮説平均との差異	0		
自由度	15		
t	-0.096017823		
P(T<=t) 片側	0.462388748		
t 境界値 片側	1.753050325		
P(T<=t) 両側	0.924777495		
t 境界値 両側	2.131449536		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	147.9	157.1	9.1
分散	903.715	848.914	
観測数	133	133	
ピアソン相関	0.587521752		
仮説平均との差異	0		
自由度	132		
t	-3.910553937		
P(T<=t) 片側	7.33003E-05		
t 境界値 片側	1.65647927		
P(T<=t) 両側	0.000146601		
t 境界値 両側	1.978098814		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	41.27819549	50.2406015	9.0
分散	147.4295967	148.3810663	
観測数	133	133	
ピアソン相関	0.286532927		
仮説平均との差異	0		
自由度	132		
t	-7.114692001		
P(T<=t) 片側	3.2078E-11		
t 境界値 片側	1.65647927		
P(T<=t) 両側	6.4156E-11		
t 境界値 両側	1.978098814		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	163.2	175.6	12.4
分散	1369.624	1226.591	
観測数	220	220	
ピアソン相関	0.727470888		
仮説平均との差異	0		
自由度	219		
t	-6.895395038		
P(T<=t) 片側	2.83392E-11		
t 境界値 片側	1.651841183		
P(T<=t) 両側	5.66783E-11		
t 境界値 両側	1.970855317		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	41.96818182	51.69090909	9.7
分散	173.7021793	157.0547115	
観測数	220	220	
ピアソン相関	0.35269946		
仮説平均との差異	0		
自由度	219		
t	-9.852401466		
P(T<=t) 片側	1.71634E-19		
t 境界値 片側	1.651841183		
P(T<=t) 両側	3.43269E-19		
t 境界値 両側	1.970855317		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	56.0075188	59.65413534	3.6
分散	236.7347915	219.4703805	
観測数	133	133	
ピアソン相関	0.316416988		
仮説平均との差異	0		
自由度	132		
t	-2.381048257		
P(T<=t) 片側	0.009345989		
t 境界値 片側	1.65647927		
P(T<=t) 両側	0.018691978		
t 境界値 両側	1.978098814		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	50.64661654	47.15789474	-3.5
分散	178.4120529	188.6036683	
観測数	133	133	
ピアソン相関	0.502336397		
仮説平均との差異	0		
自由度	132		
t	2.976441687		
P(T<=t) 片側	0.0017349		
t 境界値 片側	1.65647927		
P(T<=t) 両側	0.0034698		
t 境界値 両側	1.978098814		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	63.46818182	67.94545455	4.5
分散	303.0903072	269.3577418	
観測数	220	220	
ピアソン相関	0.632475651		
仮説平均との差異	0		
自由度	219		
t	-4.571570275		
P(T<=t) 片側	4.04582E-06		
t 境界値 片側	1.651841183		
P(T<=t) 両側	8.09164E-06		
t 境界値 両側	1.970855317		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	57.8	55.99090909	-1.8
分散	231.7315068	237.1049398	
観測数	220	220	
ピアソン相関	0.613540064		
仮説平均との差異	0		
自由度	219		
t	1.993361969		
P(T<=t) 片側	0.023731373		
t 境界値 片側	1.651841183		
P(T<=t) 両側	0.047462745		
t 境界値 両側	1.970855317		
検定結果 P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	172.8	179.4	6.6
分散	797.256	872.553	
観測数	321	321	
ピアソン相関	0.649425959		
仮説平均との差異	0		
自由度	320		
t	-4.909022042		
P(T<=t) 片側	7.30682E-07		
t 境界値 片側	1.649629305		
P(T<=t) 両側	1.46136E-06		
t 境界値 両側	1.967404907		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	44.07165109	51.78816199	7.7
分散	143.4854751	157.9237344	
観測数	321	321	
ピアソン相関	0.358684499		
仮説平均との差異	0		
自由度	320		
t	-9.940769082		
P(T<=t) 片側	9.05983E-21		
t 境界値 片側	1.649629305		
P(T<=t) 両側	1.81197E-20		
t 境界値 両側	1.967404907		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	153.6	162.6	9.1
分散	1134.047	1141.672	
観測数	194	194	
ピアソン相関	0.673699144		
仮説平均との差異	0		
自由度	193		
t	-4.626501557		
P(T<=t) 片側	3.40375E-06		
t 境界値 片側	1.652787069		
P(T<=t) 両側	6.80749E-06		
t 境界値 両側	1.972331631		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	40.94329897	49.69587629	8.8
分散	140.4786336	165.7464078	
観測数	194	194	
ピアソン相関	0.397272528		
仮説平均との差異	0		
自由度	193		
t	-8.963310686		
P(T<=t) 片側	1.35686E-16		
t 境界値 片側	1.652787069		
P(T<=t) 両側	2.71372E-16		
t 境界値 両側	1.972331631		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	66.18691589	68.35202492	2.2
分散	225.3024533	170.9100662	
観測数	321	321	
ピアソン相関	0.456778836		
仮説平均との差異	0		
自由度	320		
t	-2.633649264		
P(T<=t) 片側	0.004428811		
t 境界値 片側	1.649629305		
P(T<=t) 両側	0.008857621		
t 境界値 両側	1.967404907		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	62.5046729	59.25856698	-3.2
分散	143.3632593	188.8860592	
観測数	321	321	
ピアソン相関	0.507972858		
仮説平均との差異	0		
自由度	320		
t	4.526729985		
P(T<=t) 片側	4.22979E-06		
t 境界値 片側	1.649629305		
P(T<=t) 両側	8.45959E-06		
t 境界値 両側	1.967404907		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	58.81958763	62.72680412	3.9
分散	305.4854174	237.7643555	
観測数	194	194	
ピアソン相関	0.483448874		
仮説平均との差異	0		
自由度	193		
t	-3.236923103		
P(T<=t) 片側	0.000711066		
t 境界値 片側	1.652787069		
P(T<=t) 両側	0.001422132		
t 境界値 両側	1.972331631		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	53.82474227	50.21649485	-3.6
分散	216.2074675	242.0565141	
観測数	194	194	
ピアソン相関	0.571623538		
仮説平均との差異	0		
自由度	193		
t	3.583155633		
P(T<=t) 片側	0.000214896		
t 境界値 片側	1.652787069		
P(T<=t) 両側	0.000429791		
t 境界値 両側	1.972331631		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

資料 5 (p3) の詳細データ

- 検定方法：t-検定（一対の標本による平均の検定ツール）
 - 実施テスト：G-TELP 前期 6 月実施（Form310）後期 12 月実施（Form317）
 - 対象者：24 年度の G-TELP を前期（6 月）、後期（12 月）ともに受験した全受験生
 - 帰無仮説：「前期試験の平均点と後期試験の平均点には有意差は無い」
 - 判断基準
 - P（ $T \leq t$ ）両側＜有意水準（0.05）⇒ 棄却 ⇒ 「有意差が無い」とはいえない ⇒ 有意差が有る
 - P（ $T \leq t$ ）両側＞有意水準（0.05）⇒ 採択 ⇒ 有意差が無い
- ※両側検定にて判断

医学部（医学科）

■ T T L			
	前期	後期	平均点差
平均	209.5	222.7	13.2
分散	475.046	493.035	
観測数	54	54	
ピアソン相関	0.523166175		
仮説平均との差異	0		
自由度	53		
t	-4.509233753		
P($T \leq t$) 片側	1.81751E-05		
t 境界値 片側	1.674116237		
P($T \leq t$) 両側	3.63503E-05		
t 境界値 両側	2.005745949		
検定結果			
P($T \leq t$) 両側＜ 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T			
	前期	後期	平均点差
平均	56.37037037	63.87037037	7.5
分散	199.9357093	175.8885395	
観測数	54	54	
ピアソン相関	0.053687103		
仮説平均との差異	0		
自由度	53		
t	-2.922288721		
P($T \leq t$) 片側	0.002548987		
t 境界値 片側	1.674116237		
P($T \leq t$) 両側	0.005097974		
t 境界値 両側	2.005745949		
検定結果			
P($T \leq t$) 両側＜ 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M			
	前期	後期	平均点差
平均	78.16666667	84.81481481	6.6
分散	137.6886792	95.43675751	
観測数	54	54	
ピアソン相関	0.414560453		
仮説平均との差異	0		
自由度	53		
t	-4.157477998		
P($T \leq t$) 片側	5.90527E-05		
t 境界値 片側	1.674116237		
P($T \leq t$) 両側	0.000118105		
t 境界値 両側	2.005745949		
検定結果			
P($T \leq t$) 両側＜ 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G			
	前期	後期	平均点差
平均	75	74.03703704	-1.0
分散	79.50943396	89.13067785	
観測数	54	54	
ピアソン相関	0.323644617		
仮説平均との差異	0		
自由度	53		
t	0.662322288		
P($T \leq t$) 片側	0.255317303		
t 境界値 片側	1.674116237		
P($T \leq t$) 両側	0.510634605		
t 境界値 両側	2.005745949		
検定結果			
P($T \leq t$) 両側＞ 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ T T L			
	前期	後期	平均点差
平均	172.8	179.1	6.3
分散	654.062	632.977	
観測数	99	99	
ピアソン相関	0.588740398		
仮説平均との差異	0		
自由度	98		
t	-2.716921762		
P(T<=t) 片側	0.003895542		
t 境界値 片側	1.660551218		
P(T<=t) 両側	0.007791085		
t 境界値 両側	1.984467404		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T			
	前期	後期	平均点差
平均	43.92929293	50.97979798	7.1
分散	131.4949495	164.4485673	
観測数	99	99	
ピアソン相関	0.360130468		
仮説平均との差異	0		
自由度	98		
t	-5.0889594		
P(T<=t) 片側	8.68897E-07		
t 境界値 片側	1.660551218		
P(T<=t) 両側	1.73779E-06		
t 境界値 両側	1.984467404		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ T T L			
	前期	後期	平均点差
平均	153.4	164.3	10.9
分散	975.702	1051.793	
観測数	244	244	
ピアソン相関	0.619475541		
仮説平均との差異	0		
自由度	243		
t	-6.152602746		
P(T<=t) 片側	1.5588E-09		
t 境界値 片側	1.651148402		
P(T<=t) 両側	3.11761E-09		
t 境界値 両側	1.969774341		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T			
	前期	後期	平均点差
平均	41.04918033	49.79098361	8.7
分散	166.1951022	161.0055151	
観測数	244	244	
ピアソン相関	0.302957139		
仮説平均との差異	0		
自由度	243		
t	-9.041641262		
P(T<=t) 片側	2.51073E-17		
t 境界値 片側	1.651148402		
P(T<=t) 両側	5.02147E-17		
t 境界値 両側	1.969774341		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M			
	前期	後期	平均点差
平均	67.09090909	69.46464646	2.4
分散	219.6549165	120.1288394	
観測数	99	99	
ピアソン相関	0.436632188		
仮説平均との差異	0		
自由度	98		
t	-1.678781202		
P(T<=t) 片側	0.048190333		
t 境界値 片側	1.660551218		
P(T<=t) 両側	0.096380666		
t 境界値 両側	1.984467404		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G			
	前期	後期	平均点差
平均	61.80808081	58.66666667	-3.1
分散	110.9729953	152.5510204	
観測数	99	99	
ピアソン相関	0.489506298		
仮説平均との差異	0		
自由度	98		
t	2.678829252		
P(T<=t) 片側	0.004332721		
t 境界値 片側	1.660551218		
P(T<=t) 両側	0.008665443		
t 境界値 両側	1.984467404		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ G R M			
	前期	後期	平均点差
平均	57.5204918	62.55327869	5.0
分散	216.2259158	240.7502361	
観測数	244	244	
ピアソン相関	0.498168174		
仮説平均との差異	0		
自由度	243		
t	-5.187608148		
P(T<=t) 片側	2.24572E-07		
t 境界値 片側	1.651148402		
P(T<=t) 両側	4.49143E-07		
t 境界値 両側	1.969774341		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G			
	前期	後期	平均点差
平均	54.81147541	51.98360656	-2.8
分散	174.523983	191.2178371	
観測数	244	244	
ピアソン相関	0.538309007		
仮説平均との差異	0		
自由度	243		
t	3.397249573		
P(T<=t) 片側	0.000397575		
t 境界値 片側	1.651148402		
P(T<=t) 両側	0.00079515		
t 境界値 両側	1.969774341		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	143.7	154.1	10.4
分散	723.780	794.714	
観測数	438	438	
ピアソン相関	0.568181815		
仮説平均との差異	0		
自由度	437		
t	-8.53444155		
P(T<=t) 片側	1.17143E-16		
t 境界値 片側	1.648347962		
P(T<=t) 両側	2.34286E-16		
t 境界値 両側	1.965407254		

検定結果
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	38.19863014	46.5	8.3
分散	107.3037052	140.0080092	
観測数	438	438	
ピアソン相関	0.2493417		
仮説平均との差異	0		
自由度	437		
t	-12.73241564		
P(T<=t) 片側	4.17781E-32		
t 境界値 片側	1.648347962		
P(T<=t) 両側	8.35561E-32		
t 境界値 両側	1.965407254		

検定結果
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	174.7	196.2	21.5
分散	1000.871	574.029	
観測数	20	20	
ピアソン相関	0.252476107		
仮説平均との差異	0		
自由度	19		
t	-2.78475228		
P(T<=t) 片側	0.005904602		
t 境界値 片側	1.729132792		
P(T<=t) 両側	0.011809205		
t 境界値 両側	2.09302405		

検定結果
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	48.15	53.6	5.5
分散	176.0289474	158.8842105	
観測数	20	20	
ピアソン相関	0.33302876		
仮説平均との差異	0		
自由度	19		
t	-1.630233174		
P(T<=t) 片側	0.059759214		
t 境界値 片側	1.729132792		
P(T<=t) 両側	0.119518428		
t 境界値 両側	2.09302405		

検定結果
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	54.27625571	58.99315068	4.7
分散	205.1477644	199.2287859	
観測数	438	438	
ピアソン相関	0.442028733		
仮説平均との差異	0		
自由度	437		
t	-6.571672836		
P(T<=t) 片側	7.09582E-11		
t 境界値 片側	1.648347962		
P(T<=t) 両側	1.41916E-10		
t 境界値 両側	1.965407254		

検定結果
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	51.20091324	48.63242009	-2.6
分散	167.428649	176.8416925	
観測数	438	438	
ピアソン相関	0.393062944		
仮説平均との差異	0		
自由度	437		
t	3.718272937		
P(T<=t) 片側	0.000113344		
t 境界値 片側	1.648347962		
P(T<=t) 両側	0.000226688		
t 境界値 両側	1.965407254		

検定結果
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	68.55	76.55	8.0
分散	225.9447368	128.1552632	
観測数	20	20	
ピアソン相関	0.439496942		
仮説平均との差異	0		
自由度	19		
t	-2.501672112		
P(T<=t) 片側	0.010831952		
t 境界値 片側	1.729132792		
P(T<=t) 両側	0.021663905		
t 境界値 両側	2.09302405		

検定結果
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	57.95	66	8.1
分散	169.3131579	194.1052632	
観測数	20	20	
ピアソン相関	0.264484829		
仮説平均との差異	0		
自由度	19		
t	-2.201049248		
P(T<=t) 片側	0.02014788		
t 境界値 片側	1.729132792		
P(T<=t) 両側	0.040295759		
t 境界値 両側	2.09302405		

検定結果
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	148.3	161.1	12.7
分散	952.715	977.146	
観測数	127	127	
ピアソン相関	0.645447557		
仮説平均との差異	0		
自由度	126		
t	-5.488349236		
P(T<=t) 片側	1.06921E-07		
t 境界値 片側	1.657036982		
P(T<=t) 両側	2.13842E-07		
t 境界値 両側	1.978970576		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	39.32283465	50.98425197	11.7
分散	126.2679665	145.3648294	
観測数	127	127	
ピアソン相関	0.388250901		
仮説平均との差異	0		
自由度	126		
t	-10.18672752		
P(T<=t) 片側	1.90713E-18		
t 境界値 片側	1.657036982		
P(T<=t) 両側	3.81426E-18		
t 境界値 両側	1.978970576		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	153.6	169.5	15.9
分散	1002.585	1189.122	
観測数	203	203	
ピアソン相関	0.701655005		
仮説平均との差異	0		
自由度	202		
t	-8.836125442		
P(T<=t) 片側	2.4276E-16		
t 境界値 片側	1.652431964		
P(T<=t) 両側	4.8552E-16		
t 境界値 両側	1.971777338		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	40.39408867	50.16748768	9.8
分散	137.140955	163.9124031	
観測数	203	203	
ピアソン相関	0.377224749		
仮説平均との差異	0		
自由度	202		
t	-10.15747529		
P(T<=t) 片側	3.80413E-20		
t 境界値 片側	1.652431964		
P(T<=t) 両側	7.60826E-20		
t 境界値 両側	1.971777338		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	56.41732283	60.38582677	4.0
分散	240.4831896	199.7150356	
観測数	127	127	
ピアソン相関	0.606720388		
仮説平均との差異	0		
自由度	126		
t	-3.387808116		
P(T<=t) 片側	0.000470283		
t 境界値 片側	1.657036982		
P(T<=t) 両側	0.000940567		
t 境界値 両側	1.978970576		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	52.59055118	49.7007874	-2.9
分散	205.8627672	212.0367454	
観測数	127	127	
ピアソン相関	0.565415246		
仮説平均との差異	0		
自由度	126		
t	2.41635198		
P(T<=t) 片側	0.00855529		
t 境界値 片側	1.657036982		
P(T<=t) 両側	0.017110581		
t 境界値 両側	1.978970576		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	59.11330049	65.86206897	6.7
分散	232.8039311	253.812564	
観測数	203	203	
ピアソン相関	0.47097806		
仮説平均との差異	0		
自由度	202		
t	-5.990486831		
P(T<=t) 片側	4.72503E-09		
t 境界値 片側	1.652431964		
P(T<=t) 両側	9.45005E-09		
t 境界値 両側	1.971777338		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	54.04433498	53.44827586	-0.6
分散	204.8247574	243.4366678	
観測数	203	203	
ピアソン相関	0.60712289		
仮説平均との差異	0		
自由度	202		
t	0.638116074		
P(T<=t) 片側	0.262060429		
t 境界値 片側	1.652431964		
P(T<=t) 両側	0.524120858		
t 境界値 両側	1.971777338		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	167.4	176.0	8.6
分散	784.081	879.797	
観測数	327	327	
ピアソン相関	0.617002322		
仮説平均との差異	0		
自由度	326		
t	-6.140888373		
P(T<=t) 片側	1.19289E-09		
t 境界値 片側	1.649541158		
P(T<=t) 両側	2.38578E-09		
t 境界値 両側	1.967267455		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	43.09174312	51.26605505	8.2
分散	142.5252997	162.4719424	
観測数	327	327	
ピアソン相関	0.398584312		
仮説平均との差異	0		
自由度	326		
t	-10.90641138		
P(T<=t) 片側	4.04257E-24		
t 境界値 片側	1.649541158		
P(T<=t) 両側	8.08513E-24		
t 境界値 両側	1.967267455		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	152.0	161.1	9.1
分散	1208.868	1258.467	
観測数	184	184	
ピアソン相関	0.661727904		
仮説平均との差異	0		
自由度	183		
t	-4.263188788		
P(T<=t) 片側	1.61199E-05		
t 境界値 片側	1.653222804		
P(T<=t) 両側	3.22397E-05		
t 境界値 両側	1.973011873		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	40.8423913	48.36413043	7.5
分散	201.7291221	168.7901818	
観測数	184	184	
ピアソン相関	0.243795628		
仮説平均との差異	0		
自由度	183		
t	-6.091512772		
P(T<=t) 片側	3.22215E-09		
t 境界値 片側	1.653222804		
P(T<=t) 両側	6.4443E-09		
t 境界値 両側	1.973011873		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	63.44954128	66.62079511	3.2
分散	206.4874768	202.0827564	
観測数	327	327	
ピアソン相関	0.397379788		
仮説平均との差異	0		
自由度	326		
t	-3.654612628		
P(T<=t) 片側	0.000150044		
t 境界値 片側	1.649541158		
P(T<=t) 両側	0.000300087		
t 境界値 両側	1.967267455		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	60.85626911	58.09480122	-2.8
分散	159.3749836	182.4480404	
観測数	327	327	
ピアソン相関	0.436866736		
仮説平均との差異	0		
自由度	326		
t	3.596033756		
P(T<=t) 片側	0.000186562		
t 境界値 片側	1.649541158		
P(T<=t) 両側	0.000373124		
t 境界値 両側	1.967267455		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	58.26630435	62.54891304	4.3
分散	263.9778748	272.8391245	
観測数	184	184	
ピアソン相関	0.646645678		
仮説平均との差異	0		
自由度	183		
t	-4.217400402		
P(T<=t) 片側	1.94086E-05		
t 境界値 片側	1.653222804		
P(T<=t) 両側	3.88173E-05		
t 境界値 両側	1.973011873		
検定結果			
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却			
平均点の差は有意差が有るといえる			

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	52.86413043	50.14130435	-2.7
分散	214.8065752	242.6138038	
観測数	184	184	
ピアソン相関	0.596040826		
仮説平均との差異	0		
自由度	183		
t	2.713379542		
P(T<=t) 片側	0.00364812		
t 境界値 片側	1.653222804		
P(T<=t) 両側	0.00729624		
t 境界値 両側	1.973011873		
検定結果			
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択			
平均点の差は有意差は無い			

■ T T L

	前期	後期	平均点差
平均	207.8	218.5	10.6
分散	832.540	543.389	
観測数	31	31	
ピアソン相関	0.546547166		
仮説平均との差異	0		
自由度	30		
t	-2.334445183		
P(T<=t) 片側	0.013228698		
t 境界値 片側	1.697260851		
P(T<=t) 両側	0.026457395		
t 境界値 両側	2.042272449		

検定結果
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■ L S T

	前期	後期	平均点差
平均	50.61290323	62.29032258	11.7
分散	192.2451613	143.0795699	
観測数	31	31	
ピアソン相関	0.368702533		
仮説平均との差異	0		
自由度	30		
t	-4.454629765		
P(T<=t) 片側	5.40452E-05		
t 境界値 片側	1.697260851		
P(T<=t) 両側	0.00010809		
t 境界値 両側	2.042272449		

検定結果
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■ G R M

	前期	後期	平均点差
平均	79.70967742	82.64516129	2.9
分散	202.0129032	96.43655914	
観測数	31	31	
ピアソン相関	0.57240221		
仮説平均との差異	0		
自由度	30		
t	-1.387973719		
P(T<=t) 片側	0.087683875		
t 境界値 片側	1.697260851		
P(T<=t) 両側	0.17536775		
t 境界値 両側	2.042272449		

検定結果
P(T<=t) 両側< 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■ R D G

	前期	後期	平均点差
平均	77.51612903	73.51612903	-4.0
分散	67.05806452	77.39139785	
観測数	31	31	
ピアソン相関	0.258071587		
仮説平均との差異	0		
自由度	30		
t	2.150346497		
P(T<=t) 片側	0.019854559		
t 境界値 片側	1.697260851		
P(T<=t) 両側	0.039709119		
t 境界値 両側	2.042272449		

検定結果
P(T<=t) 両側> 0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

資料6、7 (p4)の詳細データ

t-検定結果 帰無仮説：テスト間の平均点の差には有意差がない
帰無仮説を採択 ⇒ 有意差がない
帰無仮説を棄却 ⇒ 有意差がないとはいえない ⇒ 有意差がある
t-検定：一対の標本による平均の検定ツール

23 年度前期 -23 年度後期		
	TTL (G+L+R)	TTL (G+L+R)
平均	154.7794118	163.7846639
分散	1089.961805	1075.28376
観測数	952	952
ピアソン相関	0.670590424	
仮説平均との差異	0	
自由度	951	
t	-10.40357263	
P (T<=t) 片側	2.20913E-24	
t 境界値 片側	1.64645748	
P (T<=t) 両側	4.41826E-24	
t 境界値 両側	1.962461566	
検定結果 P (T<=t) < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある		

	GRM	GRM
平均	58.98739496	62.90231092
分散	263.6991049	227.1019084
観測数	952	952
ピアソン相関	0.51300558	
仮説平均との差異	0	
自由度	951	
t	-7.801719276	
P (T<=t) 片側	8.01505E-15	
t 境界値 片側	1.64645748	
P (T<=t) 両側	1.60301E-14	
t 境界値 両側	1.962461566	
検定結果 P (T<=t) < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある		

	LST	LST
平均	41.13130252	49.09558824
分散	156.9659171	150.2884348
観測数	952	952
ピアソン相関	0.328196843	
仮説平均との差異	0	
自由度	951	
t	-17.10291788	
P (T<=t) 片側	1.10567E-57	
t 境界値 片側	1.64645748	
P (T<=t) 両側	2.21134E-57	
t 境界値 両側	1.962461566	
検定結果 P (T<=t) < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある		

	RDG	RDG
平均	54.66071429	51.78676471
分散	196.1823457	224.1889729
観測数	952	952
ピアソン相関	0.583497267	
仮説平均との差異	0	
自由度	951	
t	6.691096617	
P (T<=t) 片側	1.88863E-11	
t 境界値 片側	1.64645748	
P (T<=t) 両側	3.77727E-11	
t 境界値 両側	1.962461566	
検定結果 P (T<=t) < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある		

23 年度後期 -24 年度前期		
	TTL (G+L+R)	TTL (G+L+R)
平均	163.7846639	165.1418067
分散	1075.28376	1348.088177
観測数	952	952
ピアソン相関	0.693771958	
仮説平均との差異	0	
自由度	951	
t	-1.526183416	
P (T<=t) 片側	0.063648342	
t 境界値 片側	1.64645748	
P (T<=t) 両側	0.127296683	
t 境界値 両側	1.962461566	
検定結果 P (T<=t) > 0.05 ⇒ よって、仮説は採択 ⇒ 有意差はない		

	GRM	GRM
平均	62.90231092	62.53151261
分散	227.1019084	244.8486379
観測数	952	952
ピアソン相関	0.519435772	
仮説平均との差異	0	
自由度	951	
t	0.759392547	
P (T<=t) 片側	0.22390298	
t 境界値 片側	1.64645748	
P (T<=t) 両側	0.447805959	
t 境界値 両側	1.962461566	
検定結果 P (T<=t) > 0.05 ⇒ よって、仮説は採択 ⇒ 有意差はない		

	LST	LST
平均	49.09558824	47.79831933
分散	150.2884348	215.3683252
観測数	952	952
ピアソン相関	0.407480355	
仮説平均との差異	0	
自由度	951	
t	2.704512712	
P (T<=t) 片側	0.00348133	
t 境界値 片側	1.64645748	
P (T<=t) 両側	0.00696266	
t 境界値 両側	1.962461566	
検定結果 P (T<=t) < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある		

	RDG	RDG
平均	51.78676471	54.81197479
分散	224.1889729	249.7511498
観測数	952	952
ピアソン相関	0.503162149	
仮説平均との差異	0	
自由度	951	
t	-6.078341212	
P (T<=t) 片側	8.77821E-10	
t 境界値 片側	1.64645748	
P (T<=t) 両側	1.75564E-09	
t 境界値 両側	1.962461566	
検定結果 P (T<=t) < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある		

1-4 (p4) 各セクションの得点分布 詳細データ 1 (基礎統計)

基礎統計 (23 年度前期)

Test Date : 2011/06/27

Test Location : 鹿児島大学 1 年生

Level : 3

Test Form : 310

Examinees : 2008

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	2008	2008	2008	2008
平均	62.1	42.5	57.7	162.4
標準偏差 (n)	16.830	12.888	14.735	34.923
標準偏差 (n -1)	16.834	12.891	14.739	34.932
分散 (n)	283.256	166.098	217.120	1219.651
分散 (n -1)	283.397	166.180	217.228	1220.258
最小値	5	0	4	51
中央値	64	42	58	162
最大値	100	96	100	283
範囲	95	96	96	232
第 1 四分位数	50	33	50	139
第 3 四分位数	73	50	67	185
歪度	-0.049	0.362	-0.196	0.083
尖度	-0.499	0.274	-0.115	-0.087
変動係数	0.271	0.303	0.255	0.215

基礎統計 (23 年度前期 2 年生)

Test Date : 2011/06/27

Test Location : 鹿児島大学 2 年生

Level : 3

Test Form : 319

Examinees : 978

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	978	978	978	978
平均	63.6	49.2	55.7	168.4
標準偏差 (n)	15.663	14.160	16.165	36.728
標準偏差 (n -1)	15.671	14.167	16.174	36.747
分散 (n)	245.320	200.510	261.317	1348.928
分散 (n -1)	245.571	200.715	261.585	1350.309
最小値	14	12	0	51
中央値	64	50	54	168
最大値	100	96	96	275
範囲	86	84	96	224
第 1 四分位数	55	38	46	143
第 3 四分位数	77	58	67	193
歪度	-0.266	0.086	-0.162	-0.054
尖度	-0.418	-0.031	-0.223	-0.071
変動係数	0.246	0.288	0.290	0.218

基礎統計 (23 年度後期)

Test Date : 2011/12/12

Test Location : 鹿児島大学 1 年生

Level : 3

Test Form : 317

Examinees : 1789

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	1789	1789	1789	1789
平均	64.6	49.8	53.8	168.2
標準偏差 (n)	15.166	12.803	15.447	33.887
標準偏差 (n -1)	15.170	12.806	15.452	33.896
分散 (n)	229.999	163.909	238.621	1148.329
分散 (n -1)	230.127	164.001	238.754	1148.971
最小値	9	4	8	61
中央値	64	50	54	169
最大値	100	96	100	296
範囲	91	92	92	235
第 1 四分位数	55	42	42	147
第 3 四分位数	77	58	67	190
歪度	-0.342	0.080	-0.106	-0.026
尖度	-0.130	0.104	-0.255	-0.010
変動係数	0.235	0.257	0.287	0.201

基礎統計（24 年度前期）

Test Date：2012/06/26

Level：3

Examinees：1996

Test Location：鹿児島大学 1 年生

Test Form：310

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	1996	1996	1996	1996
平均	60.9	42.5	57.2	160.6
標準偏差（n）	16.228	13.124	14.693	34.818
標準偏差（n -1）	16.232	13.127	14.697	34.827
分散（n）	263.352	172.237	215.885	1212.327
分散（n -1）	263.484	172.323	215.994	1212.935
最小値	0	0	8	55
中央値	59	42	58	160
最大値	100	92	96	275
範囲	100	92	88	220
第1四分位数	50	33	50	138
第3四分位数	73	50	67	181
歪度	0.025	0.384	-0.307	0.102
尖度	-0.400	0.310	0.032	0.041
変動係数	0.266	0.309	0.257	0.217

基礎統計（24 年度前期 2 年生）

Test Date：2012/06/26

Level：3

Examinees：1037

Test Location：鹿児島大学 2 年生

Test Form：319

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	1037	1037	1037	1037
平均	62.8	48.2	55.3	166.2
標準偏差（n）	15.856	14.735	16.048	37.262
標準偏差（n -1）	15.864	14.742	16.056	37.280
分散（n）	251.421	217.121	257.554	1388.441
分散（n -1）	251.664	217.330	257.803	1389.781
最小値	18	12	0	56
中央値	64	46	54	165
最大値	100	96	96	275
範囲	82	84	96	219
第1四分位数	50	38	46	142
第3四分位数	73	58	67	193
歪度	-0.209	0.169	-0.292	0.017
尖度	-0.361	-0.083	-0.124	-0.163
変動係数	0.253	0.306	0.290	0.224

基礎統計（24 年度後期）

Test Date：2012/12/12

Level：3

Examinees：1774

Test Location：鹿児島大学 1 年生

Test Form：317

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	1774	1774	1774	1774
平均	64.1	50.0	53.6	167.7
標準偏差（n）	15.613	12.949	15.142	34.158
標準偏差（n -1）	15.618	12.952	15.147	34.168
分散（n）	243.774	167.666	229.292	1166.791
分散（n -1）	243.911	167.760	229.422	1167.449
最小値	14	0	4	60
中央値	64	50	54	169
最大値	100	92	96	267
範囲	86	92	92	207
第1四分位数	55	42	42	146
第3四分位数	77	58	62	191
歪度	-0.377	-0.040	-0.160	-0.126
尖度	-0.204	-0.119	-0.187	-0.074
変動係数	0.243	0.259	0.283	0.204

1-4 (p4) 各セクションの得点分布 詳細データ 2 (ヒストグラム)

各セクションの得点分布 (23 年度前期)

GRM			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	1	0.0%	
20	9	0.5%	
30	33	2.1%	
40	122	8.2%	
50	423	29.3%	
60	394	48.9%	
70	377	67.7%	
80	309	83.1%	
90	211	93.6%	
100	129	100.0%	

LST			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	3	0.1%	
20	32	1.7%	
30	347	19.0%	
40	497	43.8%	
50	702	78.7%	
60	251	91.2%	
70	114	96.9%	
80	51	99.5%	
90	9	99.9%	
100	2	100.0%	

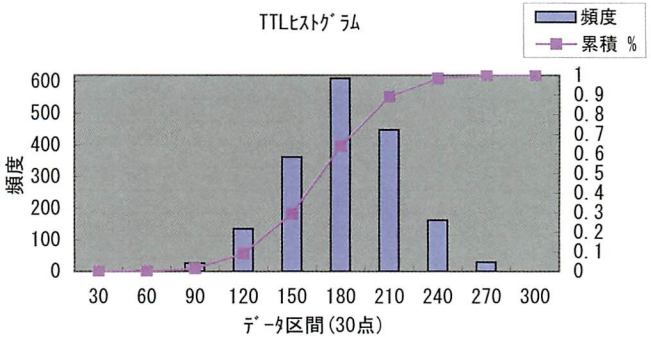
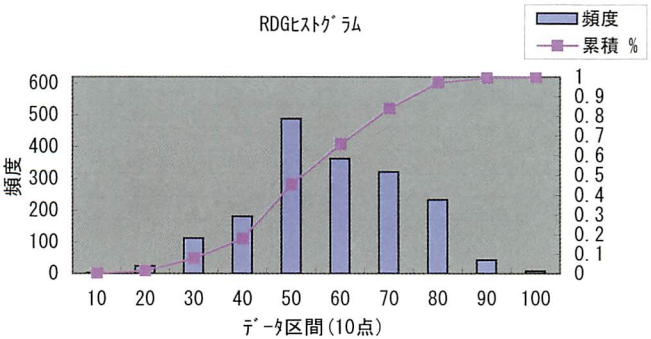
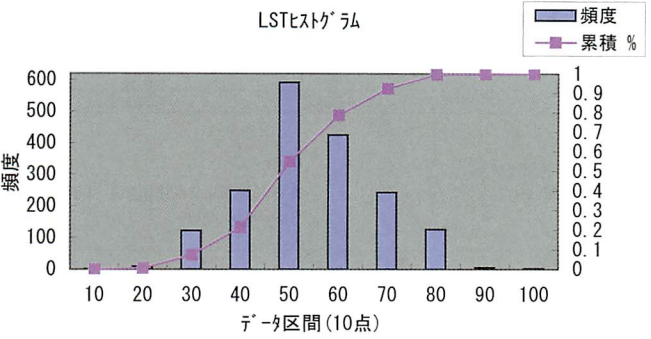
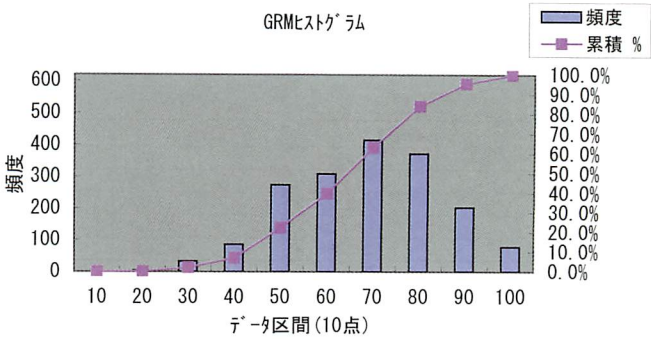
RDG			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	1	0.0%	
20	12	0.6%	
30	67	4.0%	
40	153	11.6%	
50	466	34.8%	
60	424	55.9%	
70	405	76.1%	
80	383	95.2%	
90	81	99.2%	
100	16	100.0%	

TTL (G+L+R)			
データ区間 (30 点)	頻度	累積 %	
30	0	0.0%	
60	2	0.1%	
90	29	1.5%	
120	196	11.3%	
150	506	36.5%	
180	688	70.8%	
210	402	90.8%	
240	158	98.7%	
270	25	99.9%	
300	2	100.0%	

各セクションの得点分布 (23 年度前期 2 年生)

GRM			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	0	0.0%	
20	4	0.4%	
30	11	1.5%	
40	47	6.3%	
50	179	24.6%	
60	180	43.0%	
70	190	62.5%	
80	215	84.5%	
90	110	95.7%	
100	42	100.0%	

LST			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	0	0.0%	
20	15	1.5%	
30	96	11.3%	
40	135	25.2%	
50	322	58.1%	
60	197	78.2%	
70	133	91.8%	
80	66	98.6%	
90	10	99.6%	
100	4	100.0%	



RDG			
データ区間 (10 点)		頻度	累積 %
	10	2	0.2%
	20	9	1.1%
	30	61	7.4%
	40	97	17.3%
	50	217	39.5%
	60	209	60.8%
	70	166	77.8%
	80	166	94.8%
	90	40	98.9%
	100	11	100.0%
TTL (G+L+R)			
データ区間 (30 点)		頻度	累積 %
	30	0	0.0%
	60	1	0.1%
	90	15	1.6%
	120	83	10.1%
	150	199	30.5%
	180	317	62.9%
	210	242	87.6%
	240	96	97.4%
	270	23	99.8%
	300	2	100.0%

各セクションの得点分布 (23 年度後期)

GRM		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	1	0.1%
20	4	0.3%
30	24	1.6%
40	71	5.6%
50	263	20.3%
60	353	40.0%
70	404	62.6%
80	363	82.9%
90	229	95.7%
100	77	100.0%
LST		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	2	0.1%
20	12	0.8%
30	101	6.4%
40	269	21.5%
50	646	57.6%
60	387	79.2%
70	239	92.6%
80	117	99.1%
90	15	99.9%
100	1	100.0%

RDG		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	4	0.2%
20	18	1.2%
30	121	8.0%
40	180	18.1%
50	485	45.2%
60	363	65.5%
70	298	82.1%
80	260	96.6%
90	52	99.6%
100	8	100.0%
TTL (G+L+R)		
データ区間 (30 点)	頻度	累積 %
30	0	0.0%
60	0	0.0%
90	25	1.4%
120	113	7.7%
150	392	29.6%
180	609	63.7%
210	445	88.5%
240	181	98.7%
270	22	99.9%
300	2	100.0%

各セクションの得点分布 (24 年度前期)

GRM		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	2	0.1%
20	4	0.3%
30	32	1.9%
40	125	8.2%
50	451	30.8%
60	432	52.4%
70	377	71.3%
80	316	87.1%
90	149	94.6%
100	108	100.0%
LST		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	6	0.3%
20	36	2.1%
30	355	19.9%
40	499	44.9%
50	653	77.6%
60	272	91.2%
70	102	96.3%
80	59	99.3%
90	13	99.9%
100	1	100.0%

RDG			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	4	0.2%	
20	12	0.8%	
30	88	5.2%	
40	145	12.5%	
50	420	33.5%	
60	462	56.7%	
70	422	77.8%	
80	363	96.0%	
90	69	99.4%	
100	11	100.0%	

TTL (G+L+R)			
データ区間 (30 点)	頻度	累積 %	
30	0	0.0%	
60	4	0.2%	
90	37	2.1%	
120	206	12.4%	
150	520	38.4%	
180	687	72.8%	
210	379	91.8%	
240	126	98.1%	
270	36	99.9%	
300	1	100.0%	

各セクションの得点分布 (24 年度前期 2 年生)

GRM		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	0	0.0%
20	3	0.3%
30	27	2.9%
40	35	6.3%
50	199	25.5%
60	223	47.0%
70	202	66.4%
80	186	84.4%
90	119	95.9%
100	43	100.0%
LST		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	0	0.0%
20	21	2.0%
30	105	12.2%
40	179	29.4%
50	322	60.5%
60	199	79.7%
70	128	92.0%
80	65	98.3%
90	15	99.7%
100	3	100.0%

RDG		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	2	0.2%
20	13	1.4%
30	68	8.0%
40	89	16.6%
50	234	39.2%
60	220	60.4%
70	210	80.6%
80	147	94.8%
90	48	99.4%
100	6	100.0%

TTL (G+L+R)		
データ区間 (30 点)	頻度	累積 %
30	0	0.0%
60	1	0.1%
90	23	2.3%
120	99	11.9%
150	223	33.4%
180	321	64.3%
210	249	88.3%
240	97	97.7%
270	22	99.8%
300	2	100.0%

各セクションの得点分布 (24 年度後期)

GRM		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	0	0.0%
20	4	0.2%
30	33	2.1%
40	86	6.9%
50	274	22.4%
60	309	39.8%
70	415	63.2%
80	372	84.2%
90	203	95.6%
100	78	100.0%

LST		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	1	0.1%
20	9	0.6%
30	122	7.4%
40	249	21.5%
50	592	54.8%
60	425	78.8%
70	243	92.5%
80	126	99.6%
90	5	99.9%
100	2	100.0%

RDG		
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %
10	2	0.1%
20	24	1.5%
30	112	7.8%
40	181	18.0%
50	488	45.5%
60	362	65.9%
70	321	84.0%
80	233	97.1%
90	43	99.5%
100	8	100.0%

TTL (G+L+R)		
データ区間 (30 点)	頻度	累積 %
30	0	0.0%
60	1	0.1%
90	26	1.5%
120	135	9.1%
150	362	29.5%
180	610	63.9%
210	448	89.2%
240	163	98.4%
270	29	100.0%
300	0	100.0%

鹿児島大学 英語教育改革報告書Ⅲ
平成 25（2013）年 3 月 29 日発行

編集*・発行：鹿児島大学 教育センター 外国語教育推進部
高橋玄一郎*、金岡正夫、原隆幸*、
John Tremarco、Anne Brasier（*編集者）

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元1-21-30
TEL：099-285-3705

印刷：濱島印刷株式会社
〒891-0122 鹿児島市南栄 3 - 1
TEL：099-268-6191
